
もし一夏が藍越学園を受験できていたら

ソダグァ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もし一夏が藍越学園を受験できていたら

【Nコード】

N5923R

【作者名】

ゾダグア

【あらすじ】

原作では偶然か陰謀か、IS学園を受験することになってしまった一夏。彼がもし当初の予定通り藍越学園を受験することができていたら・・・というSS。

2011年4月1日タイトル改題。そもそも原作名表示されるんですから、タイトルに入れなくてもいいですね。

1話（前書き）

地震によって多くの人が亡くなり、また、避難生活を余儀なくされています。まだボランティアが入る現地に入ることもできないので、せめて私に出来ることといったらSSを書くくらいなので、誰かの楽しみになることを願って投稿します。

1話

「全員揃ってるな。これよりSHRを始める」

黒板の前でニヒルに笑うのは担任の一条一先生。いちじょういちめ（さつき自己紹介があった）

身長は俺より少し高い程度だが、身に付けたイケメンオーラが男子学生と隔絶した感を醸し出している。

女子生徒がキヤーキヤーかしま姦しいが、左手をよく見る。薬指に指輪がはまってるぞ。

「それでは皆、1年間よろしく頼むぞ」

『はいっ！』

主に女子が中心となって元気な返事。普通、1年生になったばかりなら緊張しているものではないだろうか。かく言う俺だってクラスに中学の頃から見知った奴が多いので、さほど緊張してはいないのだが。

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け。その初日。

俺は、私立藍越学園あいえつに入学したのだ。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 1話

藍越学園は俺の第一志望の高校だった。

自宅から近い。

学力真ん中。

学園祭が毎年ある。

とまあ、高校生にとってベストな条件に加え、学費が格段に安い。その上卒業後の進路として学園法人の関連企業への就職が開けているという、超優良高校なのだ。

俺には両親がおらず、姉に養われている身なので彼女に出来るだけ楽をさせてやりたい。藍越学園に入ることはそのための第一歩なのだ。

「おい織斑^{おりむら}、お前の番だ」

「あ、すいません」

心の中でがんばろうと燃えていたら、いつの間にか自己紹介の順番が回ってきたようだ。50音順だと俺は大抵前のほうだ。俺の前のヤツの自己紹介を聞きそびれたが、幸いにも既知の愛善くんだ。

「えー……えっと、織斑^{おりむら}一夏^{いちか}です。よろしくおねがいします」

席を立った俺は教室中を見るようにして頭を下げた。

「それじゃ、織斑に質問がある者」

ハイハイと手が挙がる。知らない顔、しかも女子生徒だ。少しだけロマンスの予感？

「それじゃあ……鹿目^{しかめ}」

「はい。織斑くんって、あの『織斑^{おりむら}千冬^{ちふゆ}』さんと親戚だったりしますか？」

いきなり来た質問。俺の名字はそう沢山ある訳ではないので、よく聞かれる。

「姉です」

正直に答えると教室中がざわめきだす。

俺の姉は世界的な有名人だったりする。何せISの世界大会『モンド・グロツソ』の初代優勝者なのだ。

『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定して作られた、マルチフォーム・スーツ。既存の兵器を凌駕する性能のため軍事利用されたが、現在はスポーツとしての戦闘に用いられる。また、女性しか使用できないという特性から、女尊男卑の風潮が起こり、社会問題となっている。

infinitite stratus

あいえす

関連

IS

しののたばね
篠ノ之束

『太公望書林国語辞典第4版』（2007年）より

ISとは、正式名称を『インフィニット・ストラトス』と言う、トンデモ兵器だ。あまりに強すぎるのでついにはこれ同士を大会で戦わせ、国家の威信を示すようになってしまった。対立する2大国が核兵器をたくさん作って『どっちかが撃てば世界が滅びる』と言う状態よりはマシかもしれないが、これもあまり褒められたものではないと思う。

しののたばね
ISを作った篠ノ之束博士とも親交があったりするのだが、まあそれは置いておく。

「お前ら静かにしろ。次、河合^{かわい}」

×××××××××××

「あゝ疲れた」

入学式の日は紹介やら説明で終わった。

しかし、空き時間になるとあんなに沢山のヤツが質問してくるとは。しかも千冬姉についてばっか。

もっと新しいクラスメイトにも興味をもとうよ。

「一夏、帰ろうぜ」

赤毛の長髪に髪止めを巻いた男子生徒が俺に呼びかけてきた。中学からの友人の五反田^{ごたんだ}弾^{だん}だ。

「おう、しっかし……あんなに質問攻めにされるとは思っても無かったぜ」

「仕方ねえだろ。何せ世界最強の女の弟がクラスメイトなんだ。中学の頃だって野次馬がきたじゃんか」

中学校は小学校からの引き継ぎが多かったから、もう少しマシだった気がする。

「ところで一夏、今日は昼飯どうする？」

「そうだな……帰ってから作るのも面倒だし、駅前にあつた立ち食いそば屋で食うか」

今日のところは学校は午前中で終わった。しかし時間はすでに12時を回っている。今から帰って食事を作るとなると、14時にか

かっってしまうかもしれない。

「今日のところは俺^チん家で飯食^チってけよ」
「ありがてえ。ごちそうになる」

弾の家は『五反田食堂』と言う食堂を経営している。
俺は姉と一緒に食事をするならば自炊するのだが、自分一人だと
どうも面倒くさくなってしまう。カップ麺だってかまわないのだ。
この申し出は渡りに船と言えた。

「気にすんな。どうせ売れ残りの定食だ」
「それでもありがたいよ。ほんと、お前んところには世話になってる」
俺は、良い友達を持っている。

×××××××××××××××

「ただいま」

弾が五反田食堂の引き戸を開け、先に暖簾^{のれん}をくぐる。

「お帰りお兄^{にい}。藍越はどうだった？」

どうやら弾の妹の蘭^{らん}も帰って来ているようだ。

「おう、一夏がモテモテだったぜ。なあ？」
「モテモテって、ありゃ千冬姉の話を聞きに來た連中だぞ」

苦笑いしながら暖簾をくぐると、蘭がなにやら慌てていた。

「い、い、一夏さん!？」

「よう。蘭」

蘭は一つ下で、今は中三。有名私立女子高に通っている優等生だ。うん、俺たちとは違うね。

「ば、ばか兄^{にい}！ 一夏さんを連れてくるなら連絡くらいしなさいよ！」

「したに決まってるだろ」

「アタシにも伝えろって言うのよ！」

弾と蘭は仲が良い兄妹^{きょうだい}だなあ。

爆熱兄弟ダン＆ラン。月曜日のゴールデンタイム1時間前にテレビ東京系で放映しそうな名前だ。

「食わねえんなら下げるぞガキども」

奥から齡80にして五反田食堂の大将、一家の頂点である蔵^{げん}さんからおしかりの言葉がかかる。

中華鍋を一度に2個振るその剛腕から振るわれるあの拳骨は、脳点^{てん}が割れるかと言う威力だ。しかし、うちの姉はISに乗らずとも同じ位の威力を出しやがる。本当に人間か？

「いただきます」

「おう。食え」

俺と弾は調理場の方に向かい、お盆に乗った定食を取り、蘭と同じテーブルに着いた。

「しかし、一夏も惜しかったよな。あと一步で、IS学園でハイレム生活だろ？」

IS学園と言うのはIS操縦者の育成を専門とする学校である。名前が藍越と似ているが、全然違う。

「バカ言うなよ。男がISを操縦できるわけないんだ」

ISは女性しか操縦できない。だから試験を受けた所で男の俺が入ることなど出来やしない。それなのになぜIS学園と縁があったかと言うと、受験会場に問題があった。

去年か一昨年にあったカンニング事件のせいで会場を受験者に知らせるのは試験の2日前になってしまい、土地感のない場所で俺は危うくIS学園の受験会場に入る所だったのだ。あの眼鏡のお姉さんが教えてくれなかったら、危うく藍越の試験を逃すところだった。しかし、あのお姉さん、小柄なのにめちゃくちや胸が大きかったなあ。

「でも、お前の姉貴はあの『織斑千冬』なんだぜ？ ちったあ何かあってもいい気がするんだけどな」

「あつてたまるか。大体、女ばかりつてもそんないもんじゃないぜ？」

これは経験談だ。

千冬姉がIS関係の仕事で泊まりになった時に着替えとかを届けに行ったことがあるが、女の人ばかりで落ち着かなかった。

「そついや、IS適正診断とかあるけど蘭は受けたことあるのか？」

政府がIS操縦者を募集する一環で、女性は無料で適性を見ても
らえるらしい。

巖さんは「タダはいい。タダであるほどいい」と言う考えの人な
ので受けているのではないかと思ったのだが……。

「A判定です」

「「A!？」」

A判定だと!? それって、一番高い適正じゃなかったっけ？

「うるさいぞ」

厨房からお玉が飛んできて、弾の頭に当たった。

助かった。いくら巖さんでも、一度に2つも投げつけられはしな
い。

弾、お前の犠牲は無駄にしないぞ。

「それじゃあ、蘭は条件クリアしてる訳だ」

蘭は兄と違って優秀で、学校でも生徒会長を務めているらしい。
コイツの学力なら余裕だろう。

「大学までエスカレーター式ですから受験しませんけどね」

「そりゃそうだ」

俺に対して蘭はいつも雰囲気固いんだが、少し慣れたかな？

××××××××××××

昼食後弾の部屋におじやました後夕食と明日の朝食の材料を買い、俺は帰宅する。

「ただいま」

両親もなく、たった一人の肉親である千冬姉は仕事で一月に1、2回しか帰らないので、返事が返ってくることは稀だ。それでもやっぱり言わないと落ち着かないものだと思う。

「ん？ 誰だろ」

玄関で靴を脱いで上がると、FAX機能を持った留守番電話機のランプが光っていることに気付いた。点滅する再生ボタンを押すと合成音声録音された日時と件数を告げ、メッセージが流れた。

『ああ、うん……私だ』

発信者は千冬姉だった。

『今月は仕事が忙しく、次に帰るのは来月になると思う』

カレンダーを見ると4月はまだあと半月ほど残っている。

『お前なら大丈夫だと思うが、何かあったら私の携帯電話に連絡を入れる』

本当は職場の連絡先も知りたいのだが、なぜだか教えてはくれないのだ。入試関係の書類を書く際も色々困った。

『入学式は出てやれなくてすまなかつたな。まったく、仕事仕事と保護者らしいことをロクにしてやれん。おまえがしっかりしているからこそなんとかなるのだが……』

そんなことはないよ、千冬姉。

千冬姉が居たからこそ俺は頑張れるんだ。

色々と心配してるのか愚痴を言っているやら分からない言葉が続く。わが姉ながらこの女性^{ひめ}は、ほんと不器用すぎる。

『最後になるが、一夏、藍越への入学おめでとう』

メッセージはそこで終わった。

つづく。

今話からの原作から意図的に変更した点

- ・一夏が藍越学園に入学。
- ・弾も藍越学園に入学。（原作では市立高校）

1話（後書き）

3月25日に空いてなければいけない一行目を空ける。

2話（前書き）

2011年3月16日、鈴の苗字を間違えていたため修正。

2話

「アイツの番号は……っと、あった」

軽快な電子音の後、少女は携帯電話を顔にやる。
数回呼び出し音がした後、ようやく相手が出たようだ。

『はい、織斑です』

懐かしい声。彼女が再び日本に戻ってくるために頑張れた、その理由だ。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 2話

入学式から早一ヶ月。

高校生活も慣れ始めたころ、その電話はあった。

「はいはい、今ですよ」

その時俺はバイトのシフトを終え、着替えているところであった。
着ている途中だったシャツに急いで袖を通し、鞆に入れてあった携帯電話を取る。

「はい、織斑です」

通話ボタンを押して名乗ると、懐かしい声がした。

『私よ、鳳鈴音^{フヤンイン}』

「鈴^{りん}か！ ひさしぶりだな」

鳳鈴音。俺の小学校のころからの幼馴染である。

中2の冬に中国に帰国してしまったので以来会っていなかったが、スピーカー越しの声は変わらず明るいものだった。

『ええ。今、良い？』

いいかと聞かれると、少し困る。こっちは着替え中だし。

「バイトのシフトが終わったところだよ。今着替えてる途中だから、かけ直していい？」

『き、着替え中！？ ごめん！』

途端に電話が切られてしまった。
気を使わせてしまっただろうか？

「まあいいか。どうせかけ直すし」

俺は着替えを続けた。

××××××××××××××××

「鈴が帰ってきたって!？」

翌日、俺は学校で弾に昨日鈴とした電話の話をしていた。

「ああ。IS学園に転校したんだってさ」

「へえ……って、IS学園だあ!？」

弾の叫びにクラス中の視線が俺たちに向けられる。
そんなに叫ぶことだろうか。たしかに高校で転校、しかも今の時期は珍しいとは思っけどさ。

「アイツ、中国の代表候補生とかになったんだってよ」

代表候補生で良かったはずだ、うん。

「それってとんでもないことだぞ。あいつの執念おそるべし……」

執念？

そんなに鈴はIS好きだったわけ？

「朴念仁も行き過ぎると罪だな」

訳が分からん。

とにかく用を言わないと。

「でさ、次の日曜に会う事になったんだが、お前も来ないか？ 久しぶりに3人で町に繰り出そうぜ」

中学の入学式で意気投合した俺と弾、鈴は何かと3人で遊ぶことがあった。

たまに数馬とか他の連中も加わることもあったが、この3人でのことが一番多かった。

「いいな！ ！？」

返事をした弾が、突如体を震わせる。

「どうしたんだ、弾？」

「いや、妙な悪寒が……」

風邪か？

春雨じゃ濡れて参ろう。とか言っつて、この前傘忘れてダッシュしてたせいかな。

役者じゃないんだからカッコつけんなって。

俺？ クラスメイトが折りたたみ傘を持っていたから入れてもらえた。

「早いところ治せよ。特にお前ん家は飲食店なんだから」
「そうだな。一応日曜は参加つてことにしとく」

おっと、余鈴が鳴った。

「それじゃあな、弾」

「おう」

俺と弾のクラスは違うのだ。

次の授業は理科室で実験。用具は持っているし、急いで化学実験室に行かないと。

××××××××××

そして日曜日。俺は一人、駅前の待ち合わせ場所で鈴を待っていた。

「弾のやつもツイてないな」

弾は結局風邪をこじらせて、昨日の晩から床で伏せっている。今朝呼びに行ったら、蘭がそう教えてくれた。

ぼうつと、時計を見て待っていたが、ヒマだ。早く来すぎた俺が悪いく。

久しぶりにダチと会った。浮かれたっていいだろ？

「一夏〜！」

お、ようやく来たようだ。
声のする方に顔を向ける。

「鈴……か？」

そこに居たのは

「そうよ。凰鈴音、あんたの幼馴染。ひさしぶりね、一夏」

俺の目の前に居たのは、小柄な体躯の少女。

金色の留め金がよく似合う艶やかな黒髪を頭の左右の高い位置で結んでいる。

この髪形や声は記憶の通りなのだが、何と云うか……

「悪い。ちよつと可愛くなつてて、一瞬わからなかった」
「か、かわいい!？」

あ、動揺してる。何かイタズラをしかけて叱られたり、やりかえされた時の鈴の反応そのまんまだ。

だが最後にみた中2の冬と違つて、ただやかましいだけだったあの頃にはない『女の子らしさ』がそれとなく態度から感じられる。

さんざん女友達としてしか認識していなかったのに、この変化はちよつとだけ俺の心の男の部分を揺さぶった。

「一夏さあ、やっぱり私がいないと寂しかった？」

「まあ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろ」

「そうじゃなくつてさあ」

にこにこしている鈴はいつになく上機嫌で話を続ける。

なんだろう。いやな予感がする。昔超B級映画……って言うのもおこがましい映画のチケットを掴まされたときと似たような笑顔だ。

映画の内容？ 途中で寝ちまったからしらねえよ。

「鈴」

「ん？ なになに？」

「昼食は割り勘だぞ」

変なものを買わされないよう、予防線を張る。そうしたら鈴が姿勢を崩した。なんかギャグ漫画っぽい。

「アンタねえ……」

鈴が恨みがましそうな視線で俺を見上げる。
何かまずいこと言ったのか？

あと、なんか周囲から生暖かい視線が刺さっている気がする。
リア充ばくはつしろ？　どんな意味だよ。

××××××××××××

「でさ」

「うんうん」

お昼。

俺と鈴は一緒にファストフードのハンバーガーショップで昼食をとっていた。安い店だしお祝いもかねて奢ってやろうとしたんだが、

『代表候補生だし、試作ISのテストパイロットも兼ねてるから給料はけっこう出てんのよ』

と、逆に奢られてしまった。もちろん貸し。

『いずれアンタには給料3か月分で返してもらうからね』

こう言っていたので、後で何を奢られるかと考えるだけ怖い。
ぶるぶる。

結婚指輪並みの値段って、暴利じゃね？

怖いことはひとまず無視しとこう。二人掛けのテーブル席で俺たちは向かい合って思い出話や、近況を話し合っている。その途中、鈴が驚くべきことを言った。

「そう言えば、アンタの姉さんがIS学園で教師してたって、なんで教えてくれないのよ」

「は!？」

今、コイツは何と言ったのだ。

驚きのあまり持っていたハンバーガーを落としてしまったぞ。トレーの上だから拾い上げて食うには問題ないけど。

「だから、千冬さんがIS学園で教師やってるのよ。私のクラス担任じゃないけど、ISの実技は合同でやるから会う機会があるの。その様子だと……アンタ、知らなかった？」

「おう」

千冬姉はIS世界大会の日本代表になったあと、1年ほどドイツで軍隊教官として働いていたことがある。その後何をやっていたのかは全然教えてくれなかったのだが、まさか先生とは……。

「気にしたりとはしなかったの？」

気にしないハズがない。なにせ、たった一人の肉親なのだ。

「聞いてもはぐらかすだけで教えてくれないんだよ」

1ヶ月に1、2回しか帰ってこない千冬姉だが、仕事の事は一切口にしないのだ。ここ数年衣替えの時期になるとスーツを探すためにクローゼットの中をひっくり返すのが恒例行事なので、てっきりビジネスウーマンか何かかと思っていたが、教師だったとは。

「そう言えば千冬さんって、あんたにはIS関係のことに触れさせようとしなかったわね……」

一度千冬姉の試合のビデオをこっそり見たことがあるのだが、こ

つてりと絞られてしまった。弾に貫つたエロビデオ（姉弟物）は没収するだけだったのに……なんでだ？

まあとにかくそんな理由で、俺はあんまりISには詳しくなかったりする。

「千冬さんにも何か考えがあるんだろうけど、何かあったらどうするんだろ？」

「そんな事態が起きてみる。千冬姉より俺が先にくたばってる」

「それもそうね」

俺たちは互いに笑い合った。

その後は、ISの話題は全くなかった。

××××××××××××

「それじゃ、またね」

「ああ。気をつけて帰れよ。あと、千冬姉にもよろしく」

駅の改札前。俺は鈴を見送るために来ていた。

「うーん。千冬さんは学校では『織斑先生』だし、後の方は保証しかなるわね」

「そっか」

鈴は時計をちらちらと見ながらも俺と話を続ける。もしかして俺が残っていると鈴も入りづらいのかな？

「じゃ、こんどこそまたな」

「うん。また連絡するね」

軽く手を振り合って改札の前から離れる。

鈴も、これで帰られるだろう。時計を気にしていたんだからもう少し俺も配慮しなきゃな。

つづく。

今話からの原作から意図的に変更した点

- ・一夏が居ないのに鈴音がIS学園に転校。
- ・弾が代表候補生のことをすっかり知っている。（原作5巻で代表なんとかと、あいまいだった）
- ・鈴が一夏に買わせた映画のチケット。

2 話（後書き）

鈴の苗字を『鳳』だと思っていました。『鳳』だったんですね。セカン党員失格だ・・・。

3月25日、空いていなければいけない一行目を空ける。

3話

「織斑先生、今日はなんだか嬉しそうですね」

6月に入って間もない金曜日。織斑千冬は同寮の山田麻耶に突然そんなことを言われた。

「そうか？」

「ええ。いつもはもつと『ビシッ！』って顔なんですけど、さっきはえつと……阿修^{あしゅ}」

何か言いかけたようだったが首を横に思い切り振って言いなおす山田。

かつて先輩と後輩と言う立場だったからか、どうも彼女は千冬に對して脅えているような節があった。

「じゃなくて、お地藏さんみたいな優しい感じでした」

「ほう、それは固い笑顔と言う訳か？」

「い、いえ違います！ そう言う意味じゃなくて……」

厳しい顔で冗談を言うと、山田は慌てて否定する。

「冗談だ。私は厳しく当たる立場だからな、その位でいいのさ。」

ところで、弟の高校の入学祝いで食事に連れて行ってやろうと思っ
っているんだが、どこかいいところを知らないか？」

この発言から『織斑先生ブラコン疑惑！？』と言う学内新聞の記事が書かれてしまい、千冬は後に後悔することになる。そしてインタビューに答えた山田と、在学していた弟の幼馴染2人も。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 3話

「織斑、最近なんだか機嫌がいいな」

6月頭の土曜日。半限授業を終えてテキストやら筆記具やらを鞆に入れていたところ、そんなことを言われた。

「そうか？」

「うん。なんだか女の子とデートにでも行くみたいに浮かれてた」
「むう……」

最近出来た友人たちですら分かってしまつとは……。

「お、織斑くん。デートって本当!？」

そこにクラスの女生徒が入って来る。彼女の発言から女の子が俺たちを囲んで質問攻めにして来る。

女の子って、恋愛関係になるとすぐに興味もつな。

「ち、違つって。久しぶりに千冬ね 姉貴が家に帰って来るんだよ」

『なんだ、つまんないの』と、興味を無くして半数ほどの女子が抜

け、残る半数が

『千冬さまが！？　ぜひサインを』などと余計に熱気を持っていた。

「落ち着けつて。千冬姉はもてはやされるのとか嫌いなんだ。それに今回は着替えを取りに来るくらいだからそんなにゆっくりできないんだよ」

俺の説得が功をせいしたのか残る女子も退いて行った。

「モテモテだね、おりむ」

友人達はニヤニヤと俺を見てくる。

「よせよ、みんな千冬姉目当てだ」

「それはどうかな？　何人かはお前を名残惜しそうに見ていたぞ」
「まさか」

もしそれが本当だとしても、俺はまだ恋人を作る気はない。

千冬姉は俺のために青春を犠牲にし、恋人の一人もいない。俺が幸せになる前に、まず彼女が幸せにならないと。

そのためには俺も千冬姉を心配させないよう一人前にならないとな。

××××××××××××

「ただいま」

誰も居ないと分かっているが、今日も俺はただいまと言う。返事がないのでさびしいのが常だが、今回ばかりは違った。

「おかえり一夏」

「千冬姉!？」

2階から我が姉貴殿の返事が返ってきたのだ。
俺は急いで靴を抜いで階段を駆け上がる。

「早いな千冬姉……って、こりやなんだよ!」

思わず叫んでしまう。

廊下は放り出された段ボールの中身があふれ、まるで泥棒にでも入られたかのような。こりや部屋の中はもつとひどいぞ……。

足の踏み場を考えていると、部屋から千冬姉が出てくる。職場から帰ってすぐに始めたのかスーツ姿だ。

「一夏、私の夏用スーツを知らないか? 暖かくなってきたから衣替えをしようと思ったんだが……」

「それならクローゼットだろ? まったく、こんなに散らかして……」

溜息を吐きながら答える。

クールビューティーなその姿からは予想できないほど、わが姉ながら千冬姉は家事全般が苦手だ。千冬姉が稼いで俺が家事をすることのように分担していたためにこの欠点は克服されないまま続いている。

これでお嫁の貰い手が付くかが心配だ。見た目からだまされた奴がきつと後悔するよな。

「スーツならその後で出すから、とにかく廊下をなんとかしようぜ? 昼飯は食べた? まだならまずは昼飯作るからその間に着替え

て来いよ」

「うむ」

家にいるのにスーツと言うのも楽ではないだろう。衣替えをするならどうせクリーニングに出してからしまっし、着替えて貰っても良い。

千冬姉は頷くと部屋に戻ろうとする。が、何か倒れた様な音がして呼ばれる。

「すまん。着替えが出せなくなったから手伝ってくれ」

昼飯はもつと後になりそうだ。

××××××××××××××

片づけを終えてサマースーツを出した時には、すでに時計は15時を回っていた。

スーツのまま掃除をする訳には行かなかったので千冬姉の普段着を先に出したのだが、俺が部屋にいるのに着替えるのはよしてほしい。いくら姉弟だからとはいえ、千冬姉は綺麗だしモデルみたいな体型だから意識しちまう。

「相変わらず世話をかけるな」

「それは言わない約束だよ、おとつぁん」

珍しく千冬姉が謝罪してくるが、俺は渾身のボケで返す。

「だれがお前の父か」

たかがデコピンなのにすぐ体が揺れる。

この威力、相変わらずだ。鈴がメールで『生身でIS用の刀を振った』なんて冗談を言っても信じられそうなくらいである。

「痛いってえなあ……」

お茶を淹れながら文句を言う。恨みがましい視線を送るが、千冬姉は知らん顔だ。

「迂闊なことを言うからだ。藍越の方でもまた女をひっかけてはいないだろうな？」

「人聞きの悪いことを言うなって。千冬姉のファンが『会わせてくれ』とか『サイン欲しい』とか言うくらいだよ」

「お前は朴念仁だからな。いつも女の好意を誤解する。高校に入っただだし、彼女の一人でも作ったらどうだ？」

それはお互いさまじゃないか。心のなかでだけ言って皿洗いを開始する。

彼氏イナイ歴〃人生の千冬姉にこんなことを言ったら、殺されかねないからな。

「生憎と、俺は千冬姉が相手見つけるまでは無理だよ」

「お前はまたそんなことを言っているのか……」

呆れる声。

千冬姉にはずっと頼りつきりだったんだ。今度は俺が応援する番だろ？

「はあ……。だからお前はシスコンだのなんだのと言われるんだぞ」

るせえやい。

「お前は未熟者のくせに、妙に女を刺激することを言うからいかん。いつか刺されるぞ」

「シスコンって言われるくらいなら安いもんだ。そっちこそ、IS学園で教師をやっているいい縁があるのかよ」

「知っていたのか」

珍しくきよとした顔。

「ああ。でも、黙っていたってことは、何か理由があるんだろ？聞かねえよ」

「そうか」

千冬姉、俺の後ろに立ってどうし……ふえ？

「な、なに抱きついてるんだよ！」

「たまにはいいだろう。たまには、な」

誰にも見られるはずがないとは分かっているんだが、正直恥ずかしい。背中に大きくて柔らかいのが二つ当たってるのも良く分かるし。

ダメだダメだ！ 何意識してるんだよ俺。姉弟だぞ、姉だぞ。俺はやましい意識を振り払うために何か話題がないか探す。

む？ この腕輪はどうしたんだろ。

「千冬姉、この腕輪どうしたんだ？」

俺は千冬姉の右腕につけられている白い腕輪を指さして聞いた。

千冬姉はあまりアクセサリーとか付けないのに、めずらしい。

「ああ、これはISだ。『ひゃくしき白式』と言う。私の専用機さ」
「ふ〜ん」

千冬姉が日本代表だった時も『くわんくわん暮桜』という専用機を持っていた。その延長線上的なだろうとISに対して無知だったこの時の俺は思っていた。

つづく。

今話での原作から意図的に変更した点

・千冬姉が白式を専用機にしている。（原作では教員は訓練機使ってる）

4話

IS学園の職員室。自宅から出勤してきた千冬は、自身のデスクで鞆を開いたところ家に忘れ物をしたことに気付いた。

1年生の寮長である千冬は日曜日にも仕事がある。彼女自身が立ち会わねばならない仕事はそんなにないのだが、用事の合間に家に戻っている時間は無い。

と、その時鞆の中で携帯電話が着信を伝える。
取り出して発信者を見ると『自宅』と出ていた。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 4話

「それでは行ってくる」

「気をつけてな」

「ああ」

千冬姉は仕事が忙しらしく、一晚泊まっただけでまた仕事に出かけてしまった。また寂しくなる。

俺は玄関の鍵は開けたまま、朝食の後片付けをしようと台所に戻った。

××××××××××××

「これって……忘れちゃいけないもんじゃないのか？」

今日はバイトのシフトが入っていないので家の掃除。

身内とは言っても千冬姉は片付けが出来ないので俺が部屋の掃除をしていたのだが、机の上になにやら茶封筒が置いてある。

「急いで連絡しないと」

俺は一階に下りて電話をかける。

もしものために番号は登録してある。短縮番号を押すだけですぐさまコール音が鳴った。

『一夏か。ちょうどいい。こちらからお前に電話をかけようとしていたところだったんだ』

ワンコールで千冬姉が出た。もしワン切りだったら「ざまあみろ」ってレベルの早さ。

千冬姉も電話しようとしていたってことはやっぱり、

『私の机の上に茶色い封筒があるだろう。すまないが、あれを持って来てはくれないか？』

「ああ、わかった。どこに行けばいい？」

千冬姉からIS学園の最寄駅の場所を聞く。中に入るには許可がいるらしいが、あちらでとっておいて門に迎えの人をよこしてくれるらしい。

「それじゃ、今から家出るわ」

『スマン。頼んだぞ』

受話器を置くと俺は階段を駆け上がって部屋に戻る。そして財布と家の鍵を引っ掴むと、急いでまた階段を下った。

××××××××××××

「ええつと、ここでもいいのかな」

モノレールに揺られ、IS学園に到着。

俺は言われたとおり校門の前で待つ。休日とあって生徒の出入りがあるので、男の俺は変な注目を浴びている。

不審者って警察に突き出されやしないだろうな……。

「織斑く〜ん！ 織斑一夏くんはいますか〜？」

俺の名を呼ぶ声。

「あ、はい！ 俺です」

声のする方に手を振りながら、こちらも大声で返事。

あ、誰か走って来た。 だけえ。

「はあ……はあ……。あなたが、織斑一夏くんですか？」

走ってきた女性は身長こそ周りの女生徒とさほど変わらないが、実に豊かな胸部装甲を有していた。穏やかな声にフルフレームじゃない眼鏡で、温厚そうな人だ。

しかしなんだろう。初めて会った気がしない。これがデジャヴウと言っやつか？

「あの……？」

「え、あ、はい！」

いかんいかん。つつい意識が胸に行ってしまったぜ。女の人の胸を凝視するなんて、とんでもなく失礼じゃないか。

俺が答えると彼女は山田真耶と名乗った。千冬姉が担任をしているクラスで副担任をしているらしい。

逆から読んでもヤマダマヤ。回文だ。かいぶん

「それでは、織斑先生が待っていていらっしやるので私と一緒に来て下さい」

あれ？ 書類を渡せばそれで終わりじゃないんだ。ちょうどいいや、千冬姉の職場がどんなもんか見れるし。

俺は山田先生に連れられて校門をくぐった。

××××××××××××××

「へえー、一夏くんは藍越学園に通っているんですね」

「はい。音だけはISと似てて、勘違いする人がたまに居るんですよ。僕も入試の際間違えちゃって。IS学園の人に教えてもらったんですが……」

「え？ ああ、あの時の……」

見覚えがあると思ったら、山田先生は入試の際に会場を教えてく

れた、あのお姉さんだった。あと、話してみると見た目どおり温厚な女性^{ひと}だった。少しサイズ大きめの服を着ているので（胸以外は）幼い印象を受けるが、すれ違う生徒とあいさつをする時とか好かれている先生と言う感じた。

「あゝ！ 山ぴー男を連れこんでるう」

「ちがいますって。それと、ちゃんと山田先生って言わなきゃだめですよ」

生徒と友達感覚の先生……つつか、舐められてるね。

女ばかりの学園で俺の姿はけっこう浮いてしまっている。遠くから指さしてヒソヒソ話をされるのは正直気分の良いものじゃないな。

「い、一夏！？」

聞き知った声。

見ればツインテールのシルエット 鈴だ。学内らしく制服を着ている。彼女は友達らしき女生徒と一緒にいたのだが、俺の名を叫んで突進してきた。

「鈴か」

「鈴か。」じゃないわよ。どうしてあんたがIS学園に……もしかしてあたしに会いに？」

衝突はしなかったが、鈴は俺の傍までくると襟元を掴んで下に引き寄せる。

まで。お前の背が低くたって、俺が屈まなくちゃならないほどじゃないだろ。

「離せって。襟が伸びたらどうすんだよ。俺は千冬姉に忘れもん届

けに来ただけだ」

「あ、そうか。織斑先生がいるんだもんね……」

なんだか落胆した様子の鈴。

一体どうしたんだろ。いくらマブがいるからって、他所の学校にそうそう入るもんじゃないぞ。当り前田のクラッカー。

「あんた、またくだらないギャグ考えてない？」

ぎくっ！

「あの、織斑くん。鳳^{ファン}さんとお知り合いなんですか？」

俺と鈴がいつもどおりの会話をやっていると、蚊帳の外に追いつてしまった山田先生がここで話に割って入ってきた。

「あ、はい。幼馴染なんです」

「……………」

俺が答えたんだが、鈴は不機嫌そうだ。なんでだ？

二人を交互に見る。うん、エベレストと茶臼山位の差はあるな。

「何すんだよ！」

「うるさい！ このスケベ！」

俺を殴ると、胸を隠すようにして鈴は距離を取っている。

お前のは小さいから服の上からじゃ形が分からねえよ。

「あの、仲がいいのはよろしいのですが、織斑先生が待ってらっしゃるんですよ？」

「やべ。すいません、今行きます」

じゃあな〜！ と、鈴に手を振って別れる。

「あたしも着いてい って、みんなどうして……」

途端に鈴は女の子たちに囲まれた。背が低いから姿が見えなくなるね。

「さあ、吐きなさい！」

「一夏の薄情者〜！」

鈴の叫び声を背に俺たちは去っていった。

××××××××××××

職員室の前で、俺は山田先生に待っているように言われた。教職員エリアともなると生徒が通ることは少なく、じろじろと見られることはなくなった。

「失礼しました」

窓から訓練場の様子を見て退屈をつぶしていると、引き戸が開いて中から生徒が出てくる。彼女は俺を一瞥するとさっさと棟の外に向かって行った。あのポニーテール、なんか見覚えがあるような気がするなあ。山田先生の事もあるし、もしかしたら彼女も会ったことがあるのかも知れないが、思い出せないし声をかけるのはやめておこつ。

「待たせたな一夏」

「あ、千冬姉」

ポニーテールの女生徒が出てきてから少し。ようやく我が姉上殿の登場である。

千冬姉はこっち来いと言うように俺を手招きして先に進んで行く。俺は少し小走りになって横に着いた。

「早くなつたな」

俺のダッシュを見て、千冬姉はぼつりと呟く。

そうかな？ 俺、毎年スポーツテストは平均よりちょっと上くらいだけど。

「お前の面倒なんぞロクに見てやれなかったからな。久しぶりに見たら、あのガキが随分と大きくなったものだと思ったのさ」

まだ24歳なんだからババ臭いこというなよな。そんなんじゃ婚期逃すぞ。

言ったら殺されるから言わないけど。

「俺だつていつまでも子供じゃねえよ……」

あと3年。高校を卒業して仕事に就いたら、今度は俺が千冬姉を養ってやれる男になるんだ。いつまでも子供じゃいられないのさ。

「そう言っている内はいつまでも子供さ」

今度は頭を押さえつけられる。うわ、やめる髪の毛がくしゃくし

やになる！

「……………」

突然千冬姉が辺りを見回し始める。鋭い警戒。戦いの気配。

「どうしたんだよ？」

俺が聞くと千冬姉は何でもなかった、と首を振って言った。
違和感を感じながらも、俺たちはメインストリートに行く。

×××××××××××××

そうこうしているうちに校門にまで着いてしまった。

「今日はすまなかった。せつかくの休みだというのにな」

「良いんだよ。たった二人の姉弟なんだ、たまには家事以外でも頼
ってくれよ」

いつもとは違って、千冬姉が見送る側で俺が見送られる側の別れ。
離れるのが少しさびしく感じる。千冬姉はいつもこんな風に家を出
るのかな。

「それじゃ、俺、行くよ」

「ああ。気をつけて帰れよ」

俺はIS学園を後にした。

4話（後書き）

今話からの原作から意図的に変更した点

- ・ 平時なのに、関係者じゃない者が学園に入場できている。（許可証とか捏造したけど、きつと出入りの業者とかあるよね）
- ・ 一夏が箒に気づかない。（原作では1巻冒頭のSHR前に紹介とか挨拶されていた可能性もあるが、一応）

5話

2学期制をはじめ独自の指導要領を持っている藍越学園でも、春学期の内は他の高校とさほどカリキュラムは変わらない。

なので、テストも普通にある。

「それじゃ、中間テスト範囲は以上だ。ここからは期末の範囲になる」

古文の授業。眠気に耐えながら教科書と黒板を交互に見つつノートを取っていると、先生はそう言っただけで黒板の右半分を消し始めた。そりゃないよ。

残りの時間は中間テスト勉強の自習をさせてくださいよ。クラスメイト達はブーイングがあがるが、先生は次の話のタイトルを書き始めた。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 5話

「たくよ、どうしてどの授業も、中間の範囲終わっても進めるんだってえの」

授業を終え、俺は特別活動教室棟を歩いていた。部活動の活動教室に向かうためだ。たまたま廊下で会ったので弾も一緒だ。藍越で

は総合学習の単位として、1年生の間だけ何かしらの部活動への参加が強制されている。そうでなければもっとバイトを入れたいと言
うのが俺の本音である。

「じゃあな」

「おう。またな」

音楽室前で弾と別れる。

掃除がなかったヤツがもう練習を始めているのか、なにかしら演奏をしていた。しかし、「ごはんはおかず」って、変わった歌詞だな。主食はなんだ。パンか？ ご飯と一緒に食うなら、お好み焼きとか味が濃い物がいいな。って、これじゃ普通におかずと飯を食べるだけじゃないか。しかも炭水化物＋炭水化物でバランス悪いし。

おっと、目的地についた。俺は化学実験室の扉を開く。

そう、俺は化学部員なんだ。料理研究会も良かったんだけど、他の部員がみんな女の子の上に活動日が多いんだよ……。その点化学部は週3で、終わるのも早い。

「ちわっす」

遮光カーテンを開くと、ガスの元栓とコンセントが設けられた大きなテーブルの上では部の仲間たちが教科書やらノートを広げている。俺はクラスメイトの居る机に向かう。

「うっす」

「おりむー、掃除おつかれさん。今日の活動は『テスト勉強』だったよ」

「さっすが西先生。話がわかる」

荷物置き場にされていた丸イスを一つ貰い、俺も開いたスペースにテキストやら筆記具やらを出した。

「辞書貸してくんね？ 教室において来ちまったんだ」

「英和？ 古語？」

「英和」

「ほらよ」

鞆から辞書を取り出して正面に座っていた同輩に差し出す。

「サンキューな……って、今どき紙の辞書かよ！」

電子辞書は高い上に、壊れたら怖い。

その点紙の辞書は破れたり濡れたりしても、そうそう使えなくなることはない。それに千冬姉のお古を使えるからいいのに……。

「文句言うなら貸さないぞ」

「そんな殺生な。この通りあつしが悪うござんしたのでどうかご勘弁を」

「なら貸してしんぜよう」

「へへへ。ありがたき幸せ」

××××××××××××

夕食後部屋でテスト勉強をしていると、携帯電話が鳴った。発信者を見ると『鳳鈴音』。俺は通話ボタンを押す。

『もしもし、一夏？ あたしだけど』

スピーカーを通して聞こえるのは鈴の声。最近メールの頻度が増えてるが、電話は珍しい。

「『あたし』と言う名前の人は存じませんが」

『……あなたの幼馴染の凰鈴音よ。こう言えば満足かしら?』
「すまん鈴。俺が悪かった」

返って来たのは冷たい声。電話をかけるってことは急ぎだったのかも知れない。

『まあいいわ。ところで、今いい?』
「いいぞ」

そろそろ勉強を切り上げて風呂にでも入ろうと思っていたところだ。その前に電話くらい問題ない。

『次の日曜なんだけどね、映画の券を貰ったんだけど……』
「来週からテストだから無理」
『ええーっ!?!』

即断。鈴には悪いが、他を当たってもらおう。

「しかし、こんな時期に余裕だな。数馬の高校はもう始まつたらしいけど、ISもそろそろ中間そっちだろ?」

中学の時の友達と話して知ったのだが、数日の早い遅いがあつても大多数の高校では中間テストの時期らしい。治外法権と言うか、出島みたいなIS学園とは言えどそれはかわらないのではないか。疑問に思つて訊ねてみたところ、驚くべき返事が返ってきた。

『ISじゃ中間テストないわよ』

「なん……だと？」

IS学園でも授業数は少ないものの、俺たちが履修するような一般科目の授業があると聞いている。それなのに中間テストがないのだと？

『7月のはじめに臨海学校があるし、やってる余裕がないのよ。映画のついでに水着を選んでもらおうと思っていただけ、テストがあるなら仕方ないわね』

藍越も泊りがけの新生ガイダンスが入学直後にあつたが、雪のないスキー場の宿でカンヅメだった。それに比べ夏の海とは……。

待て、IS学園で海に行くということは……

「鈴、一つ聞いていいか」

『なによ。そんな真剣な声で』

口の中に溜まった唾を飲み込み、問う。

「千冬姉も水着になるのか？」

『……………』

実のところ、俺は千冬姉の水着姿など見たことがない。似たようなデザインのISスーツを着ているところならあるのだが、水着の写真はアルバムを見ても見つからないのだ。

しばしの沈黙の後、呆れた鈴の返事がきた。

『そりゃ、なるんじゃない？』

「写真撮って来てくれ」

『一夏のスケベ！ シスコン！！』

電話が怒声とともに切られる。耳が痛い……。

しかし、スケベはともかく、どうしてシスコン呼ばわりされなければならぬのだろうか？ テストをなしにしてまで行く臨海学校がどんなものなのか、好奇心から言っただつたのに……。解げせぬ。

つづく。

5話（後書き）

今話からの原作から意図的に変更した点

・弾の音楽系クラブへの加盟。（原作5巻で『楽器を弾けるようになりたい同好会』のメンバーとなっているので、演奏は出来なはず。）

あとがき

この話は一度6話まで書いた後、書き忘れていた中間テストの辺りの出来事を無理やり差し込んだので短めです。高校生なのにテストを省いちゃいけないよね！

6話

「よし！」

五反田蘭は自室で携帯電話を閉じると、ガッツポーズを取った。
先ほどのまでの電話の相手は兄の友人で、彼女の片思いの相手
織斑一夏。彼女は水着を買いに行くために一夏を誘い、OKとの返
事を受けたのだ。

「さうて、なにを着てこうかな？」

約束の日はまだ先だというのに、鼻歌まじりで服を選び始めてし
まう蘭。デートに誘って、行っても良いという回答を得たのだ。こ
の反応は間違っていないだろう。間違っていないのだが……相手が
悪かった。

××××××××××××

「え？」

駅に隣接したショッピングモール『レゾナンス』の入口。そこで
蘭は最も居て欲しくない人物と出会ってしまった。

「え、あ……ひ、ひさしぶりね」

凰鈴音。彼女の恋敵である。中学2年の冬に中国に帰ってしまっ
たと聞いていたのに、どうして。

「あ、はい。おひさしぶりです」

頭は若干の混乱状態にあったが、そこはお嬢様学校で生徒会長を務めているだけあって蘭は動揺をさほど見せずに対応。一応相手は年上なので、丁寧に対応する。

ここで一夏との約束があることを知られたら、せっかくのデートをつぶされかねない。それどころか、乗っ取られて一夏を持って行かれる可能性すらある。落ちついて対応せねば。

「2人とも早いな」

だが蘭が建てていた戦略も、当の一夏の登場によってあっさりと崩されてしまった。

「遅いわよ、一夏」

「まだ時間になってないだろう」

先手必勝とばかりに鈴音が一夏に話しかける。こっちに視線を送ってから一夏に話しかけたあたり、絶対こっちのことを意識している。

ここは実力行使だ。蘭は一夏の腕を取ると少し早足で口に向かう。

「それでは失礼しますね、鈴さん」

「待ちなさいよ。一夏はあたしと約束があるのよ」

なに？ 約束をしていたのは私のハズ。これはまさか……

「2人とも落ち着けよ。今日は3人で水着選ぶって……言ってなかったっけ？」

「聞いてない（ません）！！」

仇敵同士である2人だが、この時ばかりは心が通じた。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 6話

「2人ともどうしたってんだよ」

「……………」

「なあ」

俺は鈴と蘭の2人に挟まれ、無言で衣料品売りに連行されていた。

中間テストが終わった週末に蘭に水着を選んでほしいと言われて
買い物に来たのだが、鈴も誘ったのがいけなかったのだろうか。

しかし、話しかけても無視とは酷くね？ この2人、昔から仲が
良くなかったのに今は息合ってるし。

「ヒソヒソ。やぁねえ、2人もはべらせて」

「ヒソヒソ。女の敵ね」

「リア充ばくはつしろ」

周りに変な視線で見られるわ、2人が胸を押し付けてきて変に意
識してしまうわで、正直居心地が悪い。

2人とも、エスカレーターは右側を開けておかないと急ぐ人の迷

惑になるって！

××××××××××××

「暇だ……」

衣料品売り場に特設された水着コーナーで、俺は退屈を持て余していた。

「これどうですか？」

「中学生にそんなのはまだ早いわよ。それよりこっちは？」

「鈴さんだってバストサイズは私より小さいんですから、そんなセクシーな水着は似合いませんよ」

少し離れた所で鈴と蘭は互いに選んだ水着を評価し合っている。男の俺が選ぶよりも同世代の女の子の方が良いアドバイスを与えるのではないかと、鈴を誘ったのは正解だったな。

「でも、俺いらないよな……」

水着を選んでくれるよう頼まれたのに、このままぼうつとしててもしょうがない。俺も水着を買うか。

俺は一声かけてから男性用水着のコーナーに向かおうと、2人の方へ歩いて行く。

「そこのあなた」
「ん？」

いきなり声をかけられる。

女性服のコーナーに男が居るという事で他女性客の視線はあったんだが、声をかけてきたのは知らない女性だった。

「なんすか」

「その水着、片付けておいて」

いきなり見ず知らずの女性に命令される。ISが登場した、ここ10年でよく見かけるようになった出来事だ。どこの国でもIS操縦者に裏切られないように女性優遇制度を作ったのだが、その結果女尊男卑の風潮が強くなってしまい、この始末である。

けれど、俺は

「なんでだよ。自分でやれよ。人にあれこれやらせる癖がつくと、人間バカになるぞ」

従わない。知り合いとかならともかく、見ず知らずの相手にそんなことを言われる覚えなどない。

「ふうん、そういうこと言うの。あなた、自分の立場がわかっていないみたいね。」

警備員、この男をひっ捕らえなさい」

マズイことになった。今の世の中、『暴力を振るわれた』とでも言えばそれがウソだろうがホントだろうが、問答無用で拘置所行き。裁判だって100パーセント女側の証言をもとに進めるので、有罪確定だ。

疑わしきは被告人の利益に？ んなもんあるかよ。
近づいてくる警備員の姿に、少し腰が引ける。

「お待ちなさい」

そこに、思わぬ助けが入った。

「その貴女。自分の命令を聞かなかったからと言って、いきなりその態度はいただけませんわね」

声の主はロールがかった金髪の、少女マンガに出てきそうなお嬢さまだった。例えるならお蝶夫人っぽい感じ。

とにかくお蝶夫人（仮）は俺の盾になるように割って入ると、因縁つけてきた女に人差し指を突きつけて辛辣にまくし立て始めた。

「そもそも、見ず知らずの男に自分が着た服を預けるあたりからして間違っていますわ。自分が着た服ですよ？ 執事が、心に決めた方以外の男性に触らせようとは」
「うっ……」

年上が相手だというのに、お蝶夫人（仮）の猛攻は止まらない。でも、コイツも『女＞男』思考なのは一緒みたいだ。俺を助けたのではなくて、気に入くわなかっただけ？

「一夏、一体どうしたのよ」

ここで水着を選んでいた2人が俺の元にやってきた。遅いよ。俺はタカビー女が俺に命令をして、断ったら警備員を呼ばれそうになったこと。そしたらお蝶夫人（仮）が助けてくれた（？）ことを話す。

「許せませんね。この間だって、痴漢をしたって因縁つけて男の人を駅で袋叩きにする事件が起こったばかりだって言うのに……」

生徒会長を務めるだけあって常識とかしつかりしている蘭は俺に起こったことに憤っている様子だった。鈴は気が短いので女に喰ってかかるかと思ったのだが、大人しく事態を見ている。昔は短気ですぐに手が出てきたのに、落ち着きが出て貫禄がついた気がする。

「へえ。セシリアが居るかと思ったら、そんなことがあったの」

「知り合いなのか？」

「ええ」

どうやらお蝶夫人（仮）は鈴の知り合いらしい。

「アイツは『セシリア・オルコット』って言つて、イギリスの代表候補生よ。学園でのクラスは違うけど人となりは知ってるわ。女尊男卑どころか人種差別の^け気があるくらいのヤツなのに、意外ね」

代表候補生と言うと、鈴と同じ立場か。しかし、このグローバル化の時代に人種差別とは……。

「お、覚えていなさい！」

言い負かされたのか、タカビー女は捨て台詞を残して去っていった。野次馬も散っていく。警備員は事情を説明したらさっさとその場を後にしていたので、残るのは俺たち3人と、お蝶夫人（仮）改めセシリア嬢のみである。

「助かった。どうもありがとう」

結果的に助けられたので俺はオルコットさんに礼を言うが、彼女は俺のことなど眼中にないのかスルーして鈴に話しかけた。

「鈴さん。あなたもお買い物ですこと？」

「ええ。あたしの連れが世話になったようで助かったわ。ありがとうね、セシリア」

「あら、こちらの殿方は鈴さんのお連れでしたの。骨がありそうですが、躰しづけがなつてませんわよ。ライバルもいるようですし、手綱はキチンと取っていませんと……」

セシリアは俺と蘭の方に視線を視線をやってそう言った。
なんだろう。2人とも口調は和やかなんだけど、目が笑ってない。

「勘違いしてるようで悪いけど、こいつは別に恋人とかじゃないわよ。一緒にいる娘こだつて別の友達の妹だしね。

ね、一夏。蘭」

おい、いきなりこっちに振るな。

「はい。鈴さんは一夏さんの恋人じゃありませんよ」

そして蘭。どうして俺の腕に体を密着させるんだよ。

「蘭。あんた、いい度胸してるわね」

「鈴さんほどじゃありませんよ」

今度は蘭が鈴との間に不穏な空気出してるし。

「やはり、鈴さんはその方に気があるのではありませんの？ このままでは取られてしまいますわよ」

「ば……ばか。そんなじゃないって。ないってば!!」

「ですよね！ 鈴さんは一夏さんの友達ですもんね」

「あんたも調子乗るな〜っ！」

事態は混迷を深めている。鈴は二正面作戦を余儀なくされてるから不利だし。

いくら仲が悪いからって、蘭もこんな時に挑発するなよ……。

「一夏もデレデレしてないで離れろお！」

誰がデレデレしてるかっての。中学生で、しかも友達の話だぞ……。

俺が呆れていると、よく知っている声がした。

「何をしているお前ら」

千冬姉！？ どうしてここに……でも助かった。

「「お、織斑先生！？」」

IS学園生の2人は教師の登場に争いを止めた。蘭も彼女らに習う。

「あ、山田先生ご無沙汰してます」

山田先生も一緒だ。一体どうしたんだろ。

「これはご丁寧に。一夏くんもお元気そうでしたです。

じゃなくて、こんなところでケンカしちゃいけませんよ。

周りを見てください」

言われたとおり俺たちは周りを見る。

うわ、また野次馬が集まってる。

「とにかく一度場所を移しましょう」

俺たちは周囲の好奇の視線を受けながら、足早にその場を離れた。

××××××××××××

「はあ、水着を買いにですか。でも、あんなところでケンカしちゃだめですよ」

「すみません……」「」

待ち合わせしている相手がいると言って逃げたセシリアを除き、俺たちはエレベーター前のホールで注意を受ける。こうして見ると山田先生も先生っぽいね。

「ところで千冬姉と山田先生はどうしてここに？」

「私達も臨海学校のための水着を買いに来たんですよ。みなさんもまだ買っていないようですし、せっかいですから一緒に選びませんか？」

なに……？ それはつまり、山田先生と……千冬姉の水着を見られるってことか！？

「鈴、蘭。いいよな？」

「う、うん……」

「はい……」

俺は鈴と蘭に確認をする。千冬姉はともかく山田先生はセンスが
いいし、きつと参考になるぞ。

つづく。

6話（後書き）

アニメでは省かれてしまった女尊男卑の風潮を表すエピソードに、自分なりの解釈と、この作品での出番がないであろう、左足も右足なヒロインを加えて書きました。「問答無用で有罪確定」って、あの意味武士の『無礼打ち』と変わらなくてこわいですよね……。まあ、今の日本でも痴漢裁判では似たような感じですが。

ちなみに蘭ちゃんの言っている事件は、実際に新宿駅で起こります。濡れ衣を着せられて暴行を受けた私大職員の男性は警察で痴漢の被疑者として警察所に連れていかれ、数時間に渡る取り調べを受け、証拠不十分と言うことで帰宅。その後自殺しており、お母さまが目撃情報を探しておいでです。

2011年4月1日訂正。ミスを教えてくださった蒼き星さんありがとうございます。

7話

「いよっ……しゃあっ！」

IS学園の自室で通話を終えるや否や、鈴音は拳を突き上げて叫ぶ。ルームメイトのティナ・ハミルトンがびっくりしてキャップの外れたコーラのボトルをベッドに落としてしまうが、そんな悲劇は目に入らない。

なにせ、あの織斑一夏がデートに誘ったのだ。買い物に誘っただけだが、鈴音にとってはデートだ。

「いきなり叫ばないでよ！」

ティナは文句を言うが、鈴の思考は既に一夏とのデートで埋まっている。水着を買いに行つて「鈴、可愛いな」と言われているのである。

「そうよねー」

鈴音はたまらなくなり、ベッドに倒れこみ布団を抱きしめる。ぎりぎりと締まって行く布団。「鈴音ブリーカー、死ねえっ！」ってな具合だ。しかし彼女の脳内では、月明かりに照らされた夜の砂浜で一夏と水をかけあっているのである。

「……な、なに、布団でも絞殺する気？」

「そうよねー」

ティナは緊急性の高い事柄である零れたコーラの処理をしながら、鈴に皮肉を言う。だが一夏とのデートで頭が一杯の鈴の耳には入ら

ない。

「鈴、適当に返事してるでしょ」

「そうよねー」

たぶん、ファービー人形の方が今の鈴音より返事のパターンは多い。

「……はあ、もういいわ」

「そうよねー」

大量のティッシュを犠牲にしたティナは、染みになる前に洗濯しようと、シーツを外し始めた。鈴音は、その様子を見てすらいなかった。

××××××××××××

「……ってなことがあったのに、どうしてこうなってんの……」

ところが実際約束の場所に行けば友人の妹かつ恋敵なヤツはいるわ、買い物の中で好敵手と遭遇して二正面作戦を展開する羽目になるわ、一夏攻略の最大の壁と遭遇するわで

「よりによってそれを私に言っんですか？」

愚痴の相手は五反田蘭。先ほどの回想でのティナと同じように、呆れた目で鈴音を見ている。

「だってさあ、あれに割って入れる？」
「……無理ですね」

彼女らの視線の先では一夏が、彼の姉の千冬の水着を選んでいた。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 7話

臨海学校のための水着を買いに来たという千冬姉と山田先生。山田先生と鈴達は氣を使ってくれたようで、俺たち姉弟は今2人きりだ。

「で、一夏。どっちの水着がいいと思う？」

そう言つて千冬姉が見せたのは白と黒の2種類の水着。

黒い方はスポーティーでありながら、メッシュ状にクロスした部分がセクシーな逸品。

白い方は先の物とは対照的に、一切の無駄を省いたような機能性重視。どちらもビキニタイプ。俺が提案したローレグタイプのおお氣に召さなかったらしく、千冬姉はこのどちらかを購入することに決めた様だ。

どちらが似合うかと言われれば……黒い方だな。そう考えて口を開こうとした所で氣付いた。この黒水着ではおかしい男が寄つて来

るんじゃないだろうか。いや、間違いなく寄って来る。ここはストイックな印象を与える白い方だな。

「白」

千冬姉に気づかれないうつ、できるだけ平静を装って。そしていかにも直感で決めたかの様に白い水着を指す。

「黒の方が」

「いや、白の」

「うそをつけ。お前が先に注視していたのは黒の方だったぞ」

はあ、と溜息をついて千冬姉は続ける。

「昔から、お前は気に入った方を注意深く見るからな。すぐわかる」

う……なんとも簡単に見抜かれてしまった。

「まったく、弟が余計な心配をするな。大体、学園で借り切った男が1人もいない海岸なんだぞ」

「でも近くに住んでる人とか、海の家従業員とか、旅の人形師とか……」

「私がその辺りにいる程度の男になびくような女に見えるか？」

こう言われてはぐうの音もでない。俺がこんな心配するってことは、千冬姉を尻の軽い女だと見ていることになっちまう。

「……見えない」

「なら、それが答えだ。大体、手がかかる弟が自立するまでは男なんて考えてもないさ」

苦笑を浮かべる千冬姉。

くそう、それを言われると立つ瀬がないじゃないか。

受検前まで俺は新聞配達とかガキでもできるバイトをしたんだが、結局生活費の大部分 いや、九分九厘は千冬姉が出して俺の稼ぎは貯金に回されてしまった。一応は食い下がったものの、『その金は好きな女にプレゼントのひとつでも買ってやればいいだろう』とか言われて、結局貯金することにしたんだよね……。千冬姉の誕生日プレゼントを買うのに一部使ったけど。

「で、お前の方はどうなんだ？」

「え、俺？ 何が？」

千冬姉は呆れたように片手で頭を抱える。

「何かも何も、お前こそ彼女を作らないのか？ ほら、あっちにいる連中とか」

彼女の視線の先を見ると鈴と蘭が水着を選んでいた。

「あいつらは友達だぞ。そんな目でみたら失礼じゃないか」

あれ？ どうしてみんな落胆したように……。

「まあ、何にしても私の心配をする前に自分の方をどうにかするんだな。私はまだ、弟に気を遣われるような年ではないさ」

クリスマスケーキ……ぐわっ！

「安心しろ。今の世で『女性の結婚は25歳前までに結婚する方が

良い』とか言う男は、大抵結婚できない」

「あ、あんまり遅い出産だと母体にも赤ん坊にも危険だ、ぞ……」

アイアンクローを受けながらも、俺は決死の反論。

「高齢出産と言われるまで、まだ10年はある。お前は逆に10代の内に相手を孕ませそうで怖いな」

「そんな相手、いない……って！」

万力のような手から脱出し、俺は千冬姉の恐ろしさを改めて感じた。どうして俺の思考が読めるんだ……。

「あーもう、わかったよ。変な心配はしない。これでいいだろ？」

「ああ。それでいい」

最後にニヒルな笑みを残してレジの方に歩いて行く千冬姉。俺は溜息をついてレジについて行った。

××××××××××××

千冬姉と山田先生は水着を買い、さっさと学園に行ってしまった。

俺は鈴と蘭に挟まれて買い物続ける。さっきの件を反省したのか、どちらか片方は俺にはりついているので、先ほどまでとはまた違う注目を浴びてしまっている。なんとなく生暖かい視線。まあ、2人とも買う水着は大体決めていらしく、水着売り場に長居しなくて済んだのが救いか。

『それじゃあ取るよお。ハイ、チーズ!』
「っっピース!」」

そして何故か、3人でプリクラなど取っていた。
カメラを向けられると条件反射的にやってしまっ、笑顔とピースサインが画面に映る。

「これなんかどう? 怪談なんて今の季節にピッタリよ」

「ちよつと鈴さん。そのフレームじゃ私が棺桶に隠れてしまっじゃないですか! それよりはこっちの……」

「はあ? 相合傘なんて、小学生じゃないのよ」

写真を撮る時は笑顔だった2人も、フレーム選びの段になると途端にまた対立しだした。最近のプリクラではタッチパネルを使って印刷前に文字や絵を描きこむことができるのだが、互いに相手の顔にヒゲをはやしたり、赤い彗星の仮面を被せたりしている。

「2人とも顔が原型とどめていないけど、いいの?」

もはや誰だかわからない。

何故か何の加工もされなかった俺を挟むように、『Sin 鳳鈴音』と『ムゲン蘭モン』が画面の両端を支配していた。

『さっき撮ったプリは本体横の取り出し口から出るから、忘れずに持って帰ってね』

決定ボタンを押すと、シールの取り忘れに注意するアナウンスがながれ、初期画面に戻った。

筐体から出て少し。12枚のシールの貼られた台紙が取り出し口から出てきた。

「それじゃ、分けますね」

複数人で撮った時に分けやすくするため取り出し口近くにはフックでハサミがかけられていた。もうずつと使われてきたのか、刃に糊がこびりついて切りにくそうながらも、蘭は手際よくシートを各自4枚ずつ行きわたらせた。

「へへっ、」

「」

2人はそそくさと鞆や手鏡にシールを貼っている。

全体をシールで覆うくらいになるとさすがに退くが、この位なら可愛らしいものだ。俺も携帯電話を取り出すと、電池カバーの蓋の内側に1枚張り付けた。

××××××××××××

「んじゃ、またな、鈴」

それから俺たちは3人でゾンビを倒したり、喫茶でケーキを食べたりしていた。しかし楽しい時間と言うものはすぐに無くなってしまうもので、鈴の門限が近づいて来ていた。

「うん。またね、一夏」

俺と蘭はバスなので、駅とモールとの連絡口で鈴に別れを言う。

「あと、帰り道2人つきりだからって蘭にヘンなことすんじゃないわよ」

「だれがするかよ、バカ」

鈴のジョークに軽口で返す。終始仲が悪そうだった2人だが、相手のことを心配してやるくらいには仲が良くなったみたいだ。互いに反対方向なので別れる俺たち。

「してくれたらいいのに……」

「蘭、何か言ったか？」

「いえ、何も」

つづく。

7話（後書き）

今回、冒頭には阿智太郎の影響も見られる気がします。原作焼き直しな部分も多いこの作品ですが、この話では特に顕著ですね。

あとプリクラなんてリア充なものはここ十年位縁がありませんが、フレームは最初に決めてから撮ったような……。

8話

臨海学校を終え、期末テストを終え、IS学園の生徒たちに長い夏休みが始まった。

「うー、ん」

千冬はパソコンの画面から顔をあげて、固まった体をほぐす。泊まり込んでいた先生方の何人かは仕事が減ったので自宅通勤に切り替えているが、1年の寮長の千冬は寮での暮らし。しかしこの仕事が終われば、3日間の休暇だ。久々に家に帰ることができる。電話越しの弟の嬉しそうな声を思い出し、彼女も自然と頬がほころんだ。

「織斑先生、倉持技研の原山さんからお電話です。白式の後付け装^{フリセツ}備のことだそうですよ」

「……こちらに回して下さい」

彼女の夏休みは、まだ来ない。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 8話

「ええ！？ 千冬姉帰れないの？」

夏休み5日目。

今日の仕事を終えれば千冬姉は3連休と言う事で、俺は彼女の労をねぎらおうと準備をしていた。バイトも休みを入れ、家中をピカピカにし、食材もちょっと奮発した。

ところが、千冬姉に緊急の仕事が入ってまたしばらく帰れなくなつたのである。

『ああ、倉持の 白式を作った会社が緊急にとの事でな。スマンが遅くなる』

「そつか……。頑張れよ、千冬姉」

『すまん。切るぞ』

俺は受話器を置くと、台所に戻った。コンロの上では煮込んでいる途中の大鍋がコトコトと音を立てている姿が見える。ダイニングテーブルの上では下ごしらえの途中の食材が見えた。

「これ、どうしよう……」

今晚のごちそうの準備は、着々と進んでいたのだ。

xxxxxxxxxxxx

結局、日持ちしない食材と調理を始めていた物を優先的に食べ、日持ちする物は適宜使用することになった。かなりそうだった。

いつも通り1人での夕食を終えて風呂からあがったのだが、俺は

なんだかやる気が起きなくてぼうつと、テレビを流していた。夏休みの課題はまだ残っているのでさっさと進めれば良いのだが、テキストを開いても千冬姉のことが浮かんでしまうのだ。

いつの間にか、時計の針は日付が変わってしまったことを示していた。いい加減寝るべきだ。明日のことを考え、立ち上がってテレビの主電源を消す。

「チャイム？」

と、深夜にも関わらず玄関のチャイムが鳴った。

こんな時間にはたして誰だろう？ 千冬ならこの時間に帰ってもおかしくはないが、彼女は鍵を持っている。俺は警戒しながら扉をゆっくりと開く。

「こ、こんばんわ〜」

「山田先生？ こんな夜にどうかしたんですか」

やってきたのはIS学園での千冬姉の同僚である山田真耶先生だった。しかし、一体何の用なんだろう。良く見たら先生は

誰かに肩を貸している。黒髪に黒いサマースーツの女性。なんだかすごく見覚えがある。

「千冬姉！？ そんなに酔ってどうしたんだよ！ 今日は帰らないんじゃないかったのか？」

小柄な山田先生が良く運べたもんだと感心しながら、俺は千冬姉を背負う。

「1人で大丈夫ですか？」

先生は心配しているが、千冬姉くらいの体格ならおんぶで運ぶくらい平気だ。

「はい。山田先生、今日はありがとうございました」

人を背負っているので頭は下げられないものの山田先生にお礼を言う。

タクシーとか車がないけど、もしかしてここまで一人で運んだのか？

「いえいえ。それでは私は失礼しますね。 あれ？ タクシーが居ない！！」

挨拶をして去ろうとする先生。やっぱりタクシーで来たのか。後で千冬姉の分を払わないとな。でもその前に言うことがある。

「夜中に女性が一人で歩くのは危ないですし、よかつたらウチに上がって下さい」

山田先生は申し訳なさそうな顔をして、頷いた。

××××××××××××

千冬姉を部屋に運ぶと、俺は急いで来客用のカップを出す。たしかティーバッグがまだ残っていたはずだ。

「一夏くん。そんな気を使わなくても……」

繋がっている造りになっているので、居間にいる先生からは台所

にいる俺の姿が見える。ああ言うが、こんな夜中に千冬姉を担いで連れて来てくれたんだ、お茶くらい出さねば罰が当たる。

「あつた！」

ようやく見つかった黄色い箱の賞味期限の欄を確認。よし、問題なし。

「今見つかったんで、もう少し待っててください」

しばらく使ってなかった来客用のカップを軽く水洗いし、拭いてからポットのお湯を注ぐ。カップを温めている間にお茶の封を切った。そしてカップに入れたお湯を捨ててお茶の葉の入った白い小袋をカップに入れ、お湯を注ぐ。

「紅茶でいいですか？」

「はい、なんでも結構ですよ」

入れてから聞いてちゃダメだな。次からは気を付けよう。

反省しつつ俺はソーサーにカップを乗せると、お盆に乗せてリビングに向かった。

「どうぞ」

「ありがとうございます。一夏くん、慣れてますね」

「ええ。家事は俺の仕事ですから。ところで、千冬姉はどうしてあんなになるまで飲んでいたんですか？」

お茶を山田先生にお茶を渡すと、俺はテーブルを挟んで彼女の向かいに来るように腰を下ろした。

千冬姉は今日、用事ができたために帰れなくなったはずだ。それが、一体どうして。

「実は、織斑先生の用事なんですが、白式の……って、一夏くんは知らないですよね？」

「千冬姉のＩＳのことですか？」

「はい。白式を造った会社の方がお見えになるはずだったんですけど、ドタキャンされちゃいまして……。連絡が来たのは夕方だったので、帰っても夕食がないだろうと織斑先生は私と一緒に飲みに行っただけです」

「なるほど。」

「すみません。姉が面倒をかけます」

千冬姉も、予定がなくなっただけならとつと帰ればよかったのに。どうせ夕食はたくさん食べないんだから、俺が簡単な物をちゃちゃっと作れば済んだ話なんだ。それを山田先生に迷惑かけて……。

「一夏くん、気にしないでください。私も先輩　織斑先生には学生の頃からお世話になっていたんです。いつもご迷惑ばかりかけていたから、この位のことは……」

「すみません。お詫びと言っちゃなんですが、今晚は俺のベッド使ってください」

タクシー会社に電話入れようとも考えたが、やっぱりこんな夜中に、しかも酔った女性が１人で帰るのは危ない。

幸い今日は家中の掃除をしたし、シーツも洗ってあるから俺のベッドで寝ても問題ないだろう。

「え？　べ、ベッド！？　あの……私たちまだ早い、じゃなくて！……でも、このままだけは織斑先生が義姉さんねえってことで、それは魅力的な　」

どうしたんだろう。さっきより山田先生の顔が赤い。酔いが回っ

て来たのかな。

「あ、いえ、すいません。少し動転してました。私でしたら毛布が何かを貸していただければ、この部屋でもどこでも床で寝られますから」

「そうは言っても、お客さん……しかも女の人にそんなことさせられませんよ」

山田先生はけっこう遠慮深いみたいだ。でも、女の人を床に寝かして自分がベッドに入れないよな。

話し合いの結果、居間に俺の布団を持って来ることになった。

××××××××××××

山田先生に布団を届けると、俺は千冬姉の部屋に行った。酔ったせいでよく寝ている千冬姉だが、このままスーツを着ているとしわになって困るのだ。

「千冬姉、スーツがしわになるから脱がせるぞ」

酔っぱらううちに暑くなって脱いだのだろう。上着は羽織っているだけだったので、運ぶ途中で床に落ちていた。ブラウスは着たままでいいだろう。どうせ洗ったあとアイロンかけるし。寝ている間つけてるとキツいらしいけど、ブラもそのままで良い。つつか外せない。

問題はスカートだ。

「これは姉だ。姉の体なんだ。何のやましいことをしているわけで

もないぞ……」

相手は実の姉なんだ。俺は唾を飲み込み、スカートのホックに手をかける。外れた。

「う、ん……」

千冬姉が体をよじる。手を体の下にされないように急いでひっこめた。

大丈夫、起きてない。

続いて片方の腕で足を持ち上げ、もう一方でスカートを下ろして行く。膝下しか見えていなかった足が隠れ、反対に太ももは徐々に露わにされていく。ストッキングで覆われたお尻が出てきた。引き締まっていながらも、女性の色気を微塵たりとも損なっていない。

「……………」

いかんいかん。何をじろじろ見てるんだ。

迅速に、しかし起こさないようにゆっくりとスカートを脚から抜いていく。

自分が洗濯して干してるパンツなのに、どうしてこうも意識してしまうのか。

「ふう。終わった……」

かけ布団代わりの大きなタオルケットを千冬姉の体にかけてやると、俺はようやく一息吐くことができた。

額の汗をぬぐう。夏の暑さによるそれとは別種の汗。背中にも同種の汗が溜まり、シャツが体にくっついて気持ち悪い。

寝る前に着替えよう。

壁に設えたラックにかけられたハンガーを取ると、脱がせたスーツをかけてまた戻した。そして、肘などしわが付きやすい所に霧吹きでさっ、とひと吹き。

「おやすみ、千冬姉」

電気を消して千冬姉の部屋を後にする。

脳裏からは先ほどの情景が離れなかった。

××××××××××××

結局、マットを剥がしたベッドの上に横になったのは良いが、一睡もできないまま朝になっていた。材料はあるので朝食の準備をしよう。

山田先生は食べて行くのかな？ まだ寝ているといけないので、静かに洗面所に向かう。

「おはようございます、一夏くん」

「おはようございます山田先生。起きるの早いですね」

スッピンでも山田先生は綺麗だった。つうか、俺と同年齢でも通じかねない肌だ。化粧落としては鞆に入れてあったらしく、落としてから寝たらしい。

「学園で生活するならこの位は普通ですよ？ 織斑先生は一年生の寮長だから、普段はもっと早いんですしね」

「休みに家にいる時も早いですよ。もっとも、今日はそうでもない

ですけど」

生活のリズムが崩れると言って、いつも千冬姉は休みの日でも早起きだ。俺も合わせて生活していたので早起きなのだが、宿泊ガイダンスの時は同室のヤツに驚かれちまったぜ。おかげで『二ワトリ起こし』とか『日曜朝のガキ』とか言われるし。

「疲れていらっしやいますし、今日はゆっくり寝かせておいてあげてください」

「そうですね」

ほほ笑む先生。化粧しないと、ほんと俺と同世代にしか見えないな。

「ところで、朝食はどうします？ パンがないんで和食になりますけど、多めですか？ それとも朝はあまり？」

「そんな、申し訳ないですよ。一夏くんか織斑先生が起きたらお暇しようと考えていたところですよ」

「そうですか。なら、お茶淹れますからちょっと待っててください。飲んでる間に最寄りのバス停の時刻表探しますよ」

俺は返事を聞く前に台所に向かっていた。

××××××××××××

「一夏。私はどうしてここに……」

玄関先で山田先生と見送ってから少し。朝食の準備をしていると、

頭を押さえて千冬姉が台所にやってきた。

「おはよう千冬姉。昨晚のこと覚えてない？ 山田先生が連れて来てくれたんだぜ」

「そうか……山田君はどうした」

「タクシーが行っちゃったから泊めた。さつき帰っちゃったけどね」「彼女にはいつも迷惑をかけるな……」

千冬姉は冷蔵庫の扉を開けると、紙パックに入った牛乳を取り出す。そのままカップを取ろうとしたのだが……

「なんでブラウス一丁なんだよ！」

「ああ。どうせ見られたとしても、お前と真耶くらいしかだろうかな。どうと言うことはないだろう？」

千冬姉の格好は、昨日寝かせた時よりもさらにヤバい物になっていた。上はブラウス一丁で、ボタンが大きく開かれて肌が覗いている。ブラジャーも外したのか豊かな谷間がうかがえた。下は裸足にスリッパをつっかけただけで、ふとももが露^{あら}わになっている。時々ブラウスの裾から黒い下履きがちらちら姿を見せていた。

かなり問題があると思う。正直落ち着かないです。

でも、真耶？ 名前で呼ぶ仲 って、そう言えば後輩とか言ってたな。

いや、今はそれどころじゃない。

「とにかく着替えて。昨日着た服洗っちゃうからさ。飯は昨日用意してたのが残ってるから早くできるし、その間に行ってきてよ」

背中を押して台所から追い出す。

はあ、朝から疲れるなあ。

うん。

8話（後書き）

今話からの、原作から意図的に変更した点

・今話からじゃないけど、千冬姉が結構迂闊。今回はストレスでついってことで飲みすぎちゃいましたけど、彼女なら律することができてそう。

9 話

「ん、良い天気。これぞまさしく」

ガッツポーズを決めながら鈴音は言う。このあとには『デート日和』と言う単語が続くのだが、相手は朴念仁の最上級『朴念仁est』である織斑一夏。きつと友達と遊びに行くとしか認識していない。それでもだ。それでも鈴音は一縷の希望に賭けてデートの心持ちで行く。既に準備は万端。

服はこの間買った一張羅。

早起きして作った弁当。

鞆の中には一夏と一緒に選んだ水着と、もしもの時のためのアレやコレ。

それ以外にも6月あたりから食事制限をして体型を維持。薄めなのでそのままでも問題はないのだが、下の毛も整えていた。

「完っ壁！」

「あっそ」

連日鈴は浮かれているようだったので、ルームメイトのティナはまともに相手をしていたら持たないことを学習したらしく、適当にあしらっている。今も鈴音の方を見ずにカップアイスを食べていた。

「じゃああたし、出かけてくるから！」

「いつてらっしゃーい」

「よ、夜遅くなるかもしれないから！」

「ふーん」

「じゃあね！」

「じゃーねー」

後ろでドアが閉まる音を聞き、鈴音は再びガッツポーズ。そして意気揚々と歩きだした。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 9話

改札を抜けると、そこは雪国 ではなく人混みだった。

俺の眼前に広がる人の群は、おそらくすべてが屋内遊泳施設『ウォーターワールド』に並ぶ列。先週にできたばかりのこの施設は『シーガ ア』とか『わくわ ざぶ〜ん』などと同じような施設である。同じ名前がハリウッド映画にあるとか言っちゃいけない。

できたばかりのプールに夏に行くなんて、正直泳ぎに来たのか洗われるイモになりに来たのかわからないとは思うのだが、とある事情があつて俺はここにいる。

「鈴のヤツ、どこだ？」

なんでも、IS学園で出来た友人の中にここの経営者にコネがあるヤツがいたとかで、鈴が前売り券を入手したそう。鈴は最初その娘と行くつもりだったらしいのだが、突然予定が入ってキャンセル。券には日程の指定があつたのが代わりの面子を誘うも学園が夏季休暇中ともあつて帰省しているヤツが多くて、やむなく俺を誘う

事になったらしい。

でも、男女でプールって……デートと誤解されそうだな。俺は気にしないけど、鈴は学校で聞かれてからかわれるんじゃないか？

「一夏〜！」

改札から出てすぐのところにある広葉樹の木陰で待っていると、数分して鈴がやってきた。

「よう鈴。すげえ人だな」

「そうね。でもあれは当日券の列だし、あたし達にはこれがあるから心配ないわよ。」

「前売り券〜！」

鈴は片方の肩にかけていた鞆から、ドラ もんつぽくチケットを出した。そう言えばドラえんの声を演じている人って、何年か前に変わったってニュースでやってたな。

「さ、行きましょ！」

「おう！」

俺たちは列に並ぶ人たちに恨みがましい目で見られながら、前売り専用入場口へと向かった。

××××××××××××

水着に着替えて消毒用のシャワーを浴びた俺は、更衣室に入る前に分かれた鈴を探していた。更衣室の出口のあたりで待ち合わせよ

うと言っていたのだが、女性用更衣室の出口の辺りを探しても姿が見えないのだ。

女の子だし、着替えに時間がかかっているのだろうか。

少し待って、それでも来ないようだったら館内放送で呼び出してもらおうと辺りをぼうつと見てみると、少し離れた所でなにやら男女が揉めているのが見えた。男がべらべらと大声でしゃべっているせいで女の方は分からないが、どうやら強引に誘っているようだ。

「ほつといてよ」

「えー？ いいじゃんいいじゃん。俺たちと行こうぜ？」

女性優遇制度のせいで全体的に男性の立場は下がったが、その中でも例外は居る。見た目がいいのとか、おべっかがうまいヤツ。後者は自分の弁舌のためだと理解しているのでもいいのだが、前者は生来のものなので「自分は女性に愛される」と変に誤解をして自分から女性を誘ってくるのがあった。これもおそらくそのケースだろう。

まだ警備員が来る気配はない。鈴と入れちがいになったらどうしようかと思っただが、義を見てせざるは勇なきなり。昔習っていた剣道の先生の言葉に従おう。

「連れが居るから無理だつてんのよ！ いい加減失せろ」

「待ちぼうけにするような男なんてほつとけよ……。俺たちといでえ！」

男が背で姿を隠してしまう形になっているので良くは分からないが、触れようとした男の腕を後ろに捻り上げたみたいだ。昔習っていた剣道の先生が古武術もたしなんでいたので少しわかるが、かなりうまい。

感心している場合じゃないや。2体1だと分が悪いかもしれない。

いそがなきや。

「お、おい！ 離し」

もう一人いた仲間が男を助けようとするが、俺は後ろからそいつの腕を取った。

「あん？」

「2人がかりつてのは感心しないな。それに、その娘嫌がつて、鈴か」

「一夏！」

ようやく女の子の顔が見えた。案の定鈴だった。

つつか、全体的にポリウムが足りないコイツをナンパするなんて、ロリコンの気があるんじゃない……。

「いでえ！」

「あんたも失礼なこと考えてるんじゃないの」

どうして俺が考えてることわかったんだろう。

だが、格闘技術については納得だ。IS操縦者だから戦闘訓練を受けているんだもんな。

「ほら、あたしの連れは来たんだから、とつとどっかに行きなさいよ。でないと警備員が来ちゃうわよ？」

鈴が捻り上げていた腕を開放したので、俺も掴んでいた腕を離す。連中はバツが悪そうに、まるで俺たちから逃げるようにプール側に去って行ってしまった。

よかった。あれで逆ギレするような連中だったら、もっと大事に

なっていただろう。負ける気はしなかったが、そうなれば確実に休みは潰れていた。

「……ったく、遅いわよ。あんたがもっと早く来てればあんなのに関わらなくて済んだのにさ」

まるで汚いものにでも触れたかの様に鈴は手を払っている。こっちの心情も考えて欲しいものだ。

俺は文句を言っている鈴を観察する。着ているのはこの前選んだ水着。オレンジと白のストライプが入った、スポーティーなタンキニタイプだ。活動的な彼女には良く似合っていた。

「な、何よ。そんなじろじろ見ちゃって……」

鈴は俺の視線を感じたのかそわそわし始める。

年頃の女の子らしくて可愛らしい動作なのだが、水着を着ることでよく分かるようになった体型は……お世辞にも中学の頃と差異があまり感じられなかった。

「いだい……」

「誰が幼児体型かつての」

誰もそこまで酷いことは言っていない。

「お　ちょい、やめろって」

「うるさい！　あんたは昔っからデリカシーがないんだから……」

何を思ったのか、鈴はするすると俺の体を駆け上がって、肩車の体勢になってしまった。

小学校の頃から鈴はこんな感じで俺の上に乗って来るのでもう慣

れているのだが、よくまあ、高校生になってこんなにガキ臭い真似ができるな。日本に帰ってきたばかりの頃は女の子らしくなっていて意識しちまったってのに……。

「鈴」

「な、何よ？」

色気がかなり……いや、やや足りないとしておこう。そんな鈴の体つきだが、その下に隠された筋肉は鍛え上げられた戦士の物だった。それこそ、まるで千冬姉のように。

落ちないように支えるために鈴の太ももに触れてようやく気付いたことだが、幼馴染の変化に俺は少しの寂しさを覚えた。

「一夏！ 降りるから、降りるからそんなに足を撫でまわさないで

……ひゃん！」

「……！？ ああ、悪い」

屈んでやると、鈴はそそくさと降りて一撃喰らわせてきた。

「女の子の体を撫でまわすなんて何考えてるのよ、バカ！」

痛い……。

でも、これは確かに俺が悪い。気やすい仲だから忘れがちだけど、鈴だって女の子なんだ。

「すまん鈴。落ちないように足を持つだけのつもりだったんだけど、お前の足がすぐくてついつい撫で廻しちゃった」

「そ、それってあたしの足がきれいとか……？」

うん。たしかに鈴の足はすらりとしていて、『カモシカのような

脚』って言葉に当てはまる。あれ？ でも、動物園で見たカモシカの足は太かったぞ？

「ああ。それもだけど、すごく鍛えられた筋肉があった。ずいぶんとがんばったんだな」

「……………」

また殴られた。褒めたのにどうしてだろう？

あ、おい。先に行くなって。迷子になるぞ！

××××××××××××

機嫌をなおした鈴と俺は園内のプールで水をかけあったり、競争したりとかなり楽しんだ。

少し休憩しようかと空中投影ディスプレイの端に表示されている時計を見る。そろそろお昼だ。ちようどいい。

「鈴。そろそろ昼飯にしないか？」

食事にちようどよさそうな場所はまださほど取られていない。少しくらい早いが、一旦遊ぶのをやめて昼食にしようと、プールからあがって鈴に提案した。

「いいわね。どこがいいかしら」

「そうだな。対岸のベンチなんてどうだ？ 売店が近いぞ」

俺たちが先ほどまで泳いでいた流水プールを挟んで向こう側。そこは食事客を見込んでかベンチやら椅子やらが設置され、ファスト

フードを扱っていた。ああいう所で買うと高いけど、今日くらいならいいだろう。

「待つて。更衣室の近く、子供向けのプールの近くはどう？」

鈴が指したのは入る時に一悶着あった出口の辺り。人工芝が敷かれていて、ピクニックらしい雰囲気味わえそうだ。

「いいんじゃないか。それじゃあ、鈴が席を取って　いや、それだとまた絡まれるかもしれないな。一緒に売店いこうぜ」

「ああ、それなら心配いらないわよ。あたし、弁当を作ってきたから」

「準備がいいな」

ウォーターワールドでは更衣室にはカギ付きの冷蔵庫があつて、弁当をそこに置いておけるようになっていた。俺は中に売店があると聞いていたので飲食物の持ち込みには規制があると考えて用意していなかったのだが、鈴はしっかり調べていたらしい。

「それじゃあ、弁当取ってきたら席とっておいてくれよ。俺はちゃつ、と行ってなんか買ってくる」

「安心しなさい。この鈴様がちゃんとあんたの分まで弁当作っておいたから」

これはありがたい。テーマパークの中にある飲食店って、味や量は大したことなくても高いんだもんなあ。

「悪いな。それじゃあ、場所取っておくよ」

「ええ。頼んだわよ。　それと、」

俺は屈むよう要求され、

「今度ナンパ野郎が来たら、すぐ助けに来ること」

そう耳打ちして鈴は更衣室へと向かって言った。

つづく。

9 話（後書き）

今話からの、原作から意図的に変更した点

・ 鈴の一夏とのデートに対する備えの種類。アレやコレについては、各自『ジャングルでの水筒代わりになるゴム製品』などを勝手にあてはめてください。

・ 鈴がチケットや弁当の対価を取らない。（4巻参照せし。2巻でのお弁当タイムではタダで作ってあげていたのは例の約束のこともあると思われるので除く）

あとがき

ウォーターワールドをかなり捏造しました。アニメ2期があるという噂があるので、この施設の設定が深められたらどうしましょう。鈴とのデートはまだ続きます。

10話（前書き）

本編に「ちょっとおかしな人」と言う表現がありますが、これは障害を持った方への差別的な意図を持つてのことではなく、あくまでこのシチュエーションが起きた場合の周囲の反応を想定してのことです。不快感を示される方もおられるでしょうが、どうか文章表現の一つとお思ってください。

10話

凰鈴音は、大変機嫌がよかった。それはそれは上機嫌で、頬は緩んで鼻歌まで口ずさむ始末。

彼女の進路上に居た人々はあまりの幸せそうな顔に舌打ちをして避けるか、ちよっとおかしい人ではないかと思ひ、触らぬ神には祟りなしとでもいうように道を開ける。モーゼの眼前の紅海とまではいかないが、彼女が着替えた時と比べてずっと混み合っている更衣室を何の障害もなく歩いて行く。

『保管庫のナンバーと、決められた暗証番号を入力してください』

女子更衣室の中にある持ち込み食用の冷蔵庫の前に立つと、無機質な音声に従いロックを解除。解放された扉から可愛らしい模様の布包みと水筒を取り出す。

ニヘラ、とでも擬音を付けたくなるような笑み。彼女の脳内では一つしかない水筒のコップを一夏と共用し、間接キスしてしまうシチュエーションが浮かんでいる。

まー、あのおねえちゃんきもちわるーい。

しっ！ 目を合わせちゃいけません。

とか、少し離れた所で母娘が話しているが、まるで目に入っていないくらいだ。

××××××××××××

「戻ってきたらあいつ、なんで女ひっかけてんのよ……」

しかしその高揚感も長くは続かなかった。弁当を持って所定の場所に向かうと、知らない女性たちと、しかも仲良さげに語らう一夏の姿を認めたからだ。

人がせつかく弁当作ってきたのに何してんのよ。

こちらの気持ちもわからない朴念仁と、自分の獲物を横からかつさらおうとしている知らない女どもに先制パンチをくらわしてやろう。鈴音は一夏に手をふりながら彼の元に向かった。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 10話

昼食を食べる場所を確保していた俺は、たまたま藍越のクラスメイトたちに遭遇したので軽く世間話をしていた。いや、最初はそうだったのだが、女の子と来ていると言ったら彼女かとか問い詰められて、離してもらえないのだ。

「一夏〜！」

おっと、鈴が弁当を持って戻ってきたようだ。こちらに手をふっている。すごい笑顔。

「……ねえ織斑くん。ホントにカノジョじゃないの？」

「だから違っつての」

「あの娘も大変ね……」

呆れたような顔で俺を見る2人。

なんだよ。そんな目で俺を見るなよ。悪い事なんて……女の子の太ももを脳内HDDに刻むくらいしかしてないぞ？

「逢瀬^{おつせ}を邪魔しちゃ悪いし、私たちは行くね。じゃあね」

「クラスのみんなには黙っておくから安心してね〜！」

そう言つて2人は去つて行つてしまった。黙っておくといつても、絶対メールで広めるだろ。夏休み中だから逃げ場のない教室でクラス的女子みんなに問い詰められることはないハズだけど、『彼女持ち』だと広められたらこまるな……。

「おまたせ一夏。さっきの娘^こたちは？ 知り合い？」

そして鈴さん。笑顔だけど目が笑っていないのはなぜ？

「クラスの女子だよ。女の子と一緒にだつて言つたら、デートかつて問い詰められちゃった」

「で、デート！？ な、なに言つてんのかしらね、ホント。冗談はよしなさいって所よね」

冗談……『マイケル・冗談^{ジョーダン}』なんてな。

しかし鈴は慌て過ぎだぞ。中学の頃だつてからかわれる事はあったんだし、ちったあ慣れてると思うんだがなあ。

「とにかく、お昼にしましょ！ 結構自信があるんだから」
「そいつは楽しみだ」

可愛らしい猫の柄の包みを開くと、中からはタッパ―が何個が現れる。女の子のお弁当つてのはロマンなんだが、弁当箱ではなくタッパ―に入っているのは興醒めだよな……。

しかし俺の弁当への評価はタッパ―の蓋を開けることで大きく変わった。

「おお！ うまそう」

「うまそうじゃない、うまいのよ」

これ、学園の食堂のおばちゃんがよく言ってる言葉なんだよね。そう言つて全てのタッパ―が開かれる。ご飯はおにぎりで、おかずにシューマイ、春巻き、八方菜と来て最後に酢豚。

あれ、酢豚？

「酢豚……」

なんだろう。鈴と、昔約束したような……。

黙つて酢豚を見つめていると、鈴が訝しんだのか訊ねて来る。

「え？ あんた酢豚は好物でしょ？」

確かに好物だ。特に鈴の親父さんが作った酢豚は、俺が食べた酢豚の中でもトップクラスのうまさ。ザ・ベスト・オブ・酢豚と言つても過言ではない。さすが中華料理店主。

「好きだよ。でも、何か酢豚に関することがあつた気が……」
「フアイトよ、一夏」

俺は出そうで出てこない記憶に頭を抱える。

「ダメだ、思い出せない」
「そう……」

何やら期待している目をしていた鈴だったが、俺が白旗をあげる
と肩を落として残念がった。たぶん、鈴と関係する思い出なんだろ
う。

「ほつといたらふつ、と思い出すかもしれないし、今は食べましょ」
「そうだな。いただきます」

割りばしを受け取り、さっそく食事に取りかかることにした。
昔は鈴の料理の練習に付き合って試食で酷い目にあっただが、今の
実力はどうか。試しにシューマイを一個取る。口に入れて咀嚼。

「うん、うまい」
「ホント？」

鈴はシューマイを飲み込むまで、ずっと俺を見ていた。自分の料
理の評価って気になるもんな。

俺のお墨付きが付いたことで安心したのか、鈴も食事を始める。
しかし、これはなかなかのものだ。やはり親父さんの血を引いてい
るだけのことがある。

「親父さんの味そっくりだ。……あ、」

しまった。鈴の親父さんとおふくろさんは離婚しちゃったんだ。
鈴はおふくろさんに引き取られたんだけど、親父さんの事も気にか
けていて……。

「すまん鈴。気にしてることだったのに」

「いいのよ。上達したってことだしね。それより、こっちの酢豚も食べてみて。ほら、」

一瞬さみしそうな顔を見せたものの、すぐにいつもの鈴に戻る。そしてレンゲに酢豚をすくって俺に差し出した。

「おう。いただくな」

鈴が持ったままのレンゲをぱくり。

「え、あ……」

冷めているのは残念だけど、それでもこの酢豚はうまい。

鈴は俺の顔とレンゲを交互に見てどうしたんだ？

『本日のメインイベント！ 水上ペアタッグ障害物レースは午後1時より、中央巨大プールで開始いたします！ みなさまこそって御観覧下さい！』

と、ここで館内放送によって俺の思考は一時中断される。上に視線をやると空中投影ディスプレイには水着のお姉さんが映っている。彼女の後ろには『SA UKE』とか『炎のチャ ンジャー』みたいなセットが組まれていた。画面下のデジタル時計は12時30分少し過ぎを表示している。

「1時ってそろそろだし、食べたなら見に行こうぜ」

「え、あ、うん……」

俺は春巻きを取ってご飯と一緒に口へ。鈴も酢豚をレンゲで口に運び始めた。

××××××××××

『さあ！ 第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！』

司会のお姉さんがそう叫ぶと同時に大きくジャンプをする。その動きで大胆なビキニから豊満な胸が思わずこぼれそうになった。会場からは男性客を中心とした歓声があがる。俺も歓声を上げそうになるが、その前に隣にいる鈴に足の甲をかかとで踏みつけられて、代わりにあげたのは痛みの声。

「何すんだよ！」

「うつさい！ このすけべ。一体どこ見てんのよ」

もちろん胸に決まっているじゃないか。

そう言いたいけど、言ったら変態だよな。俺は内心の後ろめたさと隠そうと、ちょうど解説が始まったので、鈴の注意をそっちにそらせることにした。

「ほら、説明聞こうぜ」

「しょうがないわねえ」

この競技の概要はこうだ。施設中央にある50×50メートルの大型プールで、12組24名の女性選手が浮島の上を通って中央の島に立てられたフラッグを取るためにレースするというもの。プールに落ちてしまったらまたスタートからやり直し。途中いくつか設けられている障害は、そのどれもがペアの協力が必要と言う、なか

なかおもしろそうなものである。しかも優勝賞品は5泊6日の沖縄旅行のチケット。参加賞もあり、出るだけでもおいしそうだ。

「残念だったな、鈴。俺じゃなくて友達と一緒にだったら参加できたかもしれないのに」

「いいのよ。あんたと一緒に見てるだけでも楽しそうだしね」

千冬姉の下で訓練を積んでいる鈴とその友達のIS学園生なら、結構いいとこまでいったのだろうか。俺は気になったが、鈴は全然気にしていない模様。

「さあ！ いよいよレース開始です！ 位置について、よい……」

プールと言う湿った場所では場違いな乾燥した音。選手達は一斉にスタートした。

××××××××××××

「いやあ、結構見ごたえあったわね」

「ああ。まさか、オリンピック選手まで参加してるなんてな」

表彰式には興味がないので、決着がつくと俺たちは別のプールに向かっていた。中央プールの方では未だ沢山の歓声が上がっている。レースはただ単に身体能力を競うだけのものではなく、妨害を駆使した高度な戦術を伴うものであった。どうも誰かとグルになっっているであろう、妨害を専門とするチームがあり、彼女らの活躍によって選手の水着が脱げると言うハプニングが何件か発生。座って見ていた俺はともかく、立ち見の男性客の何人かは急に中腰になっ

てしまった。その時の鈴から刺さる視線が冷たかったのは気のせいだと信じたい。

「しかし、オリンピック選手は強かったな。去年の柔道金の木崎とレスリング銀の岸本が相手じゃ、トーシロが勝てるわけないだろ」

恐ろしいことに昨年開かれたオリンピックのメダリストがタッグを組んで参加していた。下馬評どおりに彼女らがフラッグをとって優勝している。昼食前に会ったクラスメイト2人も善戦したのだが、彼女らにあえなく敗北を喫していた。

やべ、思い出したら鼻血出そう……。

「スケベ。そんなに見たいなら、2人っきりの場所であたしを見せてあげるわよ……」

「何か言ったか？」

「べ、べつつに〜？」

何か鈴が言ってたみたいだが、注意が分身^{マイ・サン}に行っていたので気付かなかった。大事なことじゃないみたいだしいいけど。

「そうだ、あれ乗らない？」

鈴の指す先には青く、太いチューブが上から鎮座していた。

ウォーターライダーだ。一応固有名詞があるらしいけど、ウォーターライダーでいいよね？

「いいな。あれで滑ったら気持ちよさそうだ」

「決まりね。行きましょ」

××××××××××

今日一日は大会で使われた障害やら浮島で遊ぶことができるらしく、そちらに人が行ったためにすんなりとスライダーの順番は回ってきた。

「はい、それじゃあこちらに乗って下さい」

どうもフロートに乗ってすべりおちるタイプで、ボブスレーの気分が味わえるらしい。ホントかな。とにかく俺が先に座り、鈴が俺に背中を預ける形で腰掛ける。

「それでは行つてらっしゃい」

レバーが落とされる。瞬間、ロックが外され、俺たちは凄まじい速度で落ちて行く。

「「うわあああああつ!!」」

凄い速度。それでいてコースはグネグネと曲がっているので遠心力で体が揺すられる。俺は落フロートから落とされないように、鈴の小柄な体をしっかりと掴んだ。

「ひゃっ!?!」

速い。

ISどころか自動車でも出せるくらいの速度かもしれないけど、ものすごい疾走感。

しかしこの高速感も長くは続かない。少し明るくなったかと思う

と、俺たちの乗ったフロートはプールに落ちていた。

「ぶはあっ！ 気持ち良かった」

「……………」

係員がフロートを回収しに来たので、プールに降りる俺たち。次の人が来ると危ないので急いであがらないと。

「ほら、あがろうぜ」

「う、うん……………」

俺は妙に口数の少ない鈴の手を取って、プールサイドへと向かった。

××××××××××××

「今日は色々ありがとな」

「ううん。こっちこそ急に呼びだしちゃってごめん」

俺たちはウォーターワールドを後にして、駅の改札をくぐっていた。閉館にも、鈴の門限にもまだ時間はあったが、水に浸かりすぎてふやけてきたし、なによりいい加減疲れてきたからだ。俺と鈴は反対方向なので、ホームへの階段を昇る前に別れの挨拶をしている。

「それじゃ、またな」

「うん……………一夏」

そしてホームへの階段へと歩を進めようとしたら、鈴が呼び止め

てきた。

「なんだよ」

「え？ あ、あの……その……気をつけてね」

「ああ。そっちもな」

つづく。

10話（後書き）

今話の改変

・『第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース』の参加者。

今話の捏造設定

・前回に引き続き『ウォーターワールド』。

ウォーターワールド編終了です。原作では鈴はけっこう手が出てしまうほうなのですが、このシリーズではライバルが圧倒的に少ないので冷静に考える時間があり、「女の子として見てもらおう」と抑えて書いていました。でも、そろそろボロを出させてもいいですよ。

2011年5月30日。誤字の指摘があったので、訂正。

『ゆゆゆ』さん、どうもありがとうございます！

11話

「ただいま」

千冬は自宅の玄関の扉を開けると、返事がないと知りつつそう言った。彼女が帰るときは大抵弟の一夏がいて彼女を迎えるのだが、今日から3日間はいない。ちょうど彼女の休暇と被ってしまうのだが、靴を脱いで居間に向かうと、テーブルの上には書き置きらしきものが。

『千冬姉へ。』

3日分の食事が冷蔵庫に入っています。レンジで温めて食べて下さい。洗濯物は下着をネットに入れ 』

千冬が家事をしないよう、手紙には注意がいくつも書き連ねてあった。

過保護なやつだ。

呆れながらも、弟の気遣いをありがたく思う千冬。

上着を脱いで台所に向かうと、ダイニングテーブルの上に手紙がまだあった。

「これは……広告？」

レストランやファストフード、宅配ピザのクーポン付の広告。その上に、一枚だけ違う種類の紙が置いてあった。また一夏の手紙だ。千冬はそれを取り上げて読む。

『くれぐれも料理だけはしないで。もし作っておいたおかずが嫌いだったり、お客さんが来て足りなくなるようなら出前を取るか外食

して下さい』

とあった。

手に力が入り、手紙はくしゃくしゃになっていた。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 11話

8月も間もなく半ば。日本の多くの高校では、大学受験のために集中演習もそろそろお盆休みらしい。俺の通う藍越学園でも進学希望者についてはそんなのだが、多くを占める就職希望者については事情が違っていた。

「それじゃあ、まず愛善。お前は3号車だったな」
「はい」

通常の授業が始まる時間より早い時間。出席番号順で校庭に並んだ俺たちは、目的地ごとに乗る車両番号を確認されてバスへと向かう。この時乗るバスを間違えると、一日をバスで過ごさなくてはならない。

もつとも、点呼があるので大抵の場合は出発前に気づくのだが、遅れてバスに乗るのはひどく恥ずかしい。

「織斑、お前は1号車だ」
「わかりました」

グラウンドから駐車場に向かうには、一度校舎を経由しなければならぬ。貫通している土間を通って反対側の舗装路に向かう。

「おはよういつちー」
「おう。オードリー、おはよう」

下駄箱では夏季講習に参加する生徒がちらほらと登校していた。ちょうどクラスメイトが居たので挨拶を交わす。

「いつちーは研修？」
「そうだよ。お前は部活だっけ？」
「うん。国体の強化選手に選ばれたからね」
「すげえな。頑張れよ」
「いつちーも気をつけてね」

時間がある訳でもないので軽く会話をするだけで別れる。
進学か就職が決まっていなない生徒は俺と同じようにバスに乗るのだが、運動部の練習を優先する者もいる。さっき話したヤツもそのクチだ。

さて、俺の後に並んでいた生徒達……もう“さ”行か。彼らも来ているし、さっさとバスに乗らないとな。

××××××××××××

「全員確認が取れているので、今日のこのバスのルートを説明して

いく。まず」

参加者が全員バスに乗り終えたことが確認され、ようやくバスは出発した。

「まず遊星不動産。次に太陽製酪ときて」

1号車の担当の1年1組担任が停車地を順に読み上げて行く。この停車地は全て藍越学園の学校法人の関連会社だったり、取引があったりする企業だ。俺たちがこれらの企業に行くのは、研修を受けるためである。

生徒は様々な企業を見学して、今後の進路を決めたい。企業は早い内から新入社員に仕事を覚えてもらい、即戦力にした

この両者のニーズを合わせた結果、企業研修なるものが藍越学園のカリキュラムには組み込まれている。1年時は長期休暇のみだが、3年の就職クラス　まあ、大半の生徒なのだが……は、隔週位で行くらしい。これは結構評判のいい制度でよそでも真似をするようになってきたけど、外部からは「社畜産試験場^{しゃちくさんしけんじょう}」などの悪口もちらほらと聞かれている。

まあ、結構まじめそうに聞こえるかも知れないけど一年の俺たちはまだ進路がぼうつとしていることが多く、物見遊山に近い考えの連中が多い。

「兄貴に聞いたんだけど、10JOIN^{テンジョイン}は女子社員に可愛い人が多いんだって」

「万丈目電気は食堂の飯がうまい、って先輩が言ってたぞ。たのしみだなあ」

俺の行く会社の話してるやついないかな。

話しかけたいが、このバスに知り合いは少ないし、居ても近くの席に座っていなかった。

「おい、もうすぐ遊星不動産に着くぞ」

そろそろ、バスが最初の停車地に着くみたいだ。

××××××××××××

そして3日目の夕方。俺は研修を終えて帰宅した。

今日の夕食と、明日の朝食だけは千冬姉と一緒に食べられる。食品会社に行ったらお土産をもらったので、これも夕食の一品に加えてみよう。

「たっだいまゝ！」

「おかえり、一夏」

靴を脱いで上がると、千冬姉の声が聞こえた。

居間の襖を開くと、千冬姉はお茶を飲みながらテレビを見ていた。

「研修はどうだった？」

「楽しかったよ。お土産もらったから晩メシの時に一緒に食べよう」

「ほう、それは楽しみだ」

あれ？　なんだか千冬姉、そわそわしてる。どうかしたんだろうか。

「荷物置いたら準備するから、メシはまだ待っててね」

「その必要ならないぞ。私が用意した」

どうも空耳を聞いたようだ。俺は台所に向かう。

「夕食なら、私が既に用意したと言っている」

「そうか、ありがとう　　って、ええ!？」

空耳では無かったようだ。俺は台所を見る。ダイニングテーブルにはラップのかかった皿と、鍋が鎮座していた。

「すごいじゃんか。家事全然ダメだと思ってたけど、料理できたんだな」

「大したことじゃないさ。このくらい誰にもできる」

昔の千冬姉は料理・洗濯・掃除全てだめだったので、必然的に俺が主夫になっていたのだが、料理ができるようになっていたとは知らなかった。

しまった。それなら、あんな手紙を書かなくてもよかったじゃないか。

「ごめん千冬姉。俺、千冬姉が昔みたいに料理、まるでダメだと思ってたからあんな手紙書きちまって……」

「いつもお前に家事を任せてばかりだったからな。たまには食事くらい用意してやるさ」

「そんな、千冬姉がいなかったら俺なんて」

うつ、千冬姉の顔をとてもじゃないけど見られない。

この間山田先生に運ばれた時は「俺がいないとダメだな」とか思っただけど、今の千冬姉にはとてもじゃないけどそんなこと言えないよ。

あれ？ 千冬姉1人で何でもできるなら、俺って……。

落ち込み、俺はその場に膝を突く。だが千冬姉は俺の正面で屈みこむと、俺をゆっくりと抱きしめた。

「そんなに落ち込むな。お前がそんな様子では、私まで辛い」

「千冬姉……！」

「一夏、自分を卑下するな。お前がしっかりしているから、私は安心して働きに出られるんだぞ。」

さあ、夕食にしよう。冷めてしまっているし、温め直さないと
な

「うん！」

千冬姉と一緒に俺は立ち上がる。

布越しながらもはつきりと頭に当たっていた、あの弾力と柔らかさは名残惜しい。だけど、今日は織斑一夏が織斑千冬に抱いていた誤解を解いた記念日だ！

俺はテーブルに向かう。

「あれ？ これ、なんだ」

ふと、足元に市指定のごみ袋が置いてあることに気付いた。燃えるゴミの袋だが、中身はスーパで総菜を小分け売りしている器。洗ってプラスチック製容器包装の袋に入れた上で捨てなければいけないゴミだ。いや、この店のなら、洗って店に持って行けばポイントが付くな。

俺は少し冷たい視線で千冬姉の方を見る。

「私は自分で作ったとは、一言も言っていないぞ。さあ、食べよう」
「そんなことだと思った」

溜息を吐く。

でも、どこか心のどこかに安心している俺がいた。

つづく。

11話（後書き）

今話の改変

・今更だけど、千冬さんの言動。

千冬さんはきつと某虎マスクの人みたい

に「聞け！ 獅子は、我が子を谷底に突き落とし、這い上がってきた子のみを育てるといふ……」。

だが、甘い！

甘すぎる！！

私なら這い上がってきた子を、再び突き落としてみせよう！！

そう、何度でもだ！！」って成分が入ってるハズ。

しかし、一向に千冬姉の女性らしいところが書けないなあ・・・。

今話の捏造設定

・藍越学園の企業研修プログラム。

あとがき

藍越学園が関連企業に卒業生をかなり送りこんでいるのなら、こんなシステムがあってもいいんじゃないか。そう思って研修を捏造しました。モデルはドイツのデュアルシステムのつもりです。肝心の内容は……下手なこと書くは無知がさらけ出されそうなのでパスです。

次回、西瓜を二つ装備した幼馴染の逆襲が始まります。

2011年6月11日ルビ訂正。指摘してくださった『蒼き星』さんありがとうございました。

12話

「^{ほろき}篝ちゃん。ちょっといらっしやいな」

なんだろう。叔母さんの呼ぶ声がする。

あらかた着替えは済んでいたので、少女は小走りに駆けながら髪を結ぶ。

「雪子叔母さん。なにか御用ですか？」

引き戸を開けると叔母は男性と一緒にいた。まだ少年らしさが抜けきらないが、精悍な印象を持っている彼には見覚えがある。

「どう、篝ちゃん？　一夏くんが会いに来てくれたわよ」

少女は、頭の中が真っ白になった。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 12話

「3番テーブルの冷製パスタ2、あがりました」

たった今作り終えたばかりの料理をフロアと厨房の間に作られた台に載せ、ボタンでフロア係に伝達。その間に新しく来た注文票を確認し、業務用冷蔵庫に向かう。

世間では企業や学校がお盆と言うことで休みを取っているが、俺のバイト先は逆に稼ぎ時と言う事で繁盛していた。

「織斑くん、悪いけど業務用のアイス取って来てくんない？」

「あ、はい。これが終わったらすぐに」

夏休みでも、いつもならこの位の時間になると客はけっこうひいている。しかし今日は爺さん婆さんと子供夫婦、それに孫の組み合わせが何組もいた。その上パートのおばさんが何人か帰省しているので忙しいこと限りなかった。

××××××××××××

「お疲れさまでした」

「お疲れ」

朝からシフトに入っていた俺は、夕方にバイトを抜けた。入れ替わりに入る大学生の同僚と更衣室で挨拶を交わすと、俺は裏口から店を出る。いつもは流れの緩やかな店の前の道が、今日は珍しく混雑しているのが伺えた。何人かは浴衣を着ている。

そうだ、今日は神社でお盆祭りがあったっけ。

友達に誘われたことを、ふと思い出した。誘われた時はシフトがまだ決まっていなかったし、お盆は休む人が多いからなるべく入って欲しいと頼まれていたので断ったのだ。

「神社か。最近行っていないな」

お祭りの催される篠ノ之神社^{しんのみ}は、俺にとって深い縁のある場所である。その神主さんは剣術の師範をやっていて、俺と千冬姉はこの門下生をやっていたのだ。道場が境内にあり、神主一家がある事情で引越してしまうまでは家族ぐるみで付き合いがあった。

せっかくバイトも終わったことだし、ちょっと見に行こうか。夕食はどうせ一人だし、出店で売っている物で済ませてもいい。

俺は神社へと進路を変えた。

××××××××××××

参道は出店と、それ目当ての人々でごった返していた。しかし地方の神社なのでたかが知れているし、運営側も苦慮しているらしく身動きが取れないということはなかった。

適当に店を冷やかしていると、人の集まっている一角があることに気付いた。見れば奉納舞台ではお神楽が始まっていた。

白無垢に金の飾りを付け、鞘を佩いた女性がお囃子^{はやし}に合わせて舞っている。右手に刀、左手に扇を持つという『一刀一扇』の型は俺が習った篠ノ之流剣術の型にもなっている。

舞っているのはおそらくは師範の縁者だ。遠目だし化粧をしているためにわからないが、近くで見たら案外知っている人かも知れない。そんなことを考えつつ見ていたら、舞は佳境に入っていた。

扇で受け、払う。そして剣の鋭い一閃。そして残心が入り、お囃子が止まる。女性は扇を帯に差し込み、刀を鞘に納める。扇に紐で付けられた鈴が、軽やかに鳴った。

彼女が舞台を後にしようとすると、周りから盛大な拍手が贈られる。

俺も拍手をしていると、後から声をかけられた。

「あれ？……一夏、さん？」

振り返れば浴衣姿の女子5人。各自色合いが違う浴衣を着ているので、なんとかレンジャーって感じた。

「ん？ おー、蘭か」

うち1人は蘭。浴衣でもあの特徴的な髪止めは付けてる。でも後ろで結いあげる、結構面倒な髪形だ。

「き、奇遇ですね……」

なんだろう。最近は俺にもだいぶ慣れたようだったが、今日は昔みたいにどこか緊張した様子だ。普段と違う服装だからかな。

よし。緊張をほぐすために、さりげなく会話の途中で褒めてみよう。

「そうだなー。案外知り合いとばかり会っただけだ。弾は？」

「さ、さあ？ 家で寝てるんじゃないんですか？」

「ふーん、そっか。蘭の浴衣姿は初めて見たけど、結構似合うな」

「そ、そうですか？ ありがとうございます……」

顔をうつ向かせてしまう蘭。

おかしいな。緊張をほぐそうとさりげなく褒めたのに、会話が止まってしまった。

「あー、会長が照れてるー。めずらしー」

「そっかあ。他校の男子はもちろん同校の女子になびかない理由は

「これかあ」

「会長、ふぁいと」

後ろにいた一団がはやし立てる。

この位の年の女の子ってほんつと、こんな話が好きだよなあ。もつとも、年上の余裕がある俺は、この位じゃ動じないけど。

「あつ、あなたたちねえっ！」

蘭は真っ赤になって彼女らを追いかけ始めた。

「きゃー、会長が怒った！」

「逆鱗触れた」

「こわーい」

ニヤニヤ笑いながら、のらりくらりと蘭の手を逃れる4人のらりくらり……のらくら……。

なんだろう。黒い犬を連想してしまった。

「こんなところで走ったら危な……」

「一夏くん？」

蘭たちを注意しようとしたら、不意に後ろから呼びかけられる。振り返ると、40代後半の物腰の落ち着いた女性。しばらく会ってなかったから老けた様に感じるけど、たぶんこの人は……。

「雪子おばさんですか？」

「そうよ。覚えててくれてうれしいわ」

柔らかな笑みを浮かべる女性。

この人はこの神主の姉妹で、今は神社の管理を代行している。昔は俺も祭りの時には手伝いをして、おこづかいを貰ったつけ。

「しばらく見ないうちにすっかり立派になったわねえ。箒ちゃんもだけど、しばらく見ないうちに大きくなってるものね」

雪子おばさんは人好きのする笑顔を浮かべている。昔と変わらぬ人好きのする笑顔。思えば、この人が怒る所を俺は見たことがなかった気がする。

あれ？ いま、「箒ちゃんも」って言ったか？

「箒に会ったんですか？」

箒とは神主夫妻の下で、俺と同じ年の幼馴染だ。姉の束^{たづな}さんが、かの有名なIS開発者 篠ノ之束であるために家族そろって国の保護下に入って以来帰っていないはずだが、どこかで会う機会があったのだろうか。

「さっきまであの舞台で踊っていたのよ。気付かなかったかしら？」
「舞が篠ノ之流でしたし、師範^{せんせい}……いえ、親父さんと縁があるんじゃないかとは思ってました。でも、まさか箒が帰って来ているとは……」

ずいぶん綺麗になっておどろいたでしょ。

雪子おばさんは相変わらぬ笑顔のままそう言って続ける。

「せっかくだし、会っていかない？ あの子も一夏くんのこと気にしてたから、きっと喜ぶわよ」

「……………」

正直、箒が俺のことを気にしてくれているとは思わなかった。

さすがに忘れていたという不義理なことは 束さんを見てる限りありえたな。転校してすぐのころに手紙を出したが返事が来なかったので、俺たち友達じゃなかったのかよと思ったものだ。

「やめておく？」

俺が返事をしなかったので、俺が箒に会いたくないとも思っただろうか。この誤解は解かないと。

「いえ。ぜひ会わせて下さい」

「それじゃ、ついて来てね」

「はい」

一回蘭が走っていった方を見る。もう彼女らの姿はうかがえない。「じゃあな」くらいは言っておくべきかと思ったが、わざわざ探してまで言うことはないだろう。俺は雪子おばさんについて社務所の方へと向かった。

××××××××××××

先にお守り売り場まで行ったが、箒は着替えを終えていないらしくまだ来ていなかった

他のバイト達と違って楔をしなければいけない箒は、風呂場のある母屋で着替えているそうなので俺たちは母屋へと向かった。

「箒ちゃん。ちょっといらっしやいな」

インターホンがないので、叔母さんは大きめの声で家に呼びかけた。

少し待っていたところ木目の廊下を走る音がしたかと思うと、巫女服姿の女性が引き戸を開けて現れた。

「雪子叔母さん。なにか御用ですか？」

出てきた女性　いや、女の子には見覚えがある。いや、箒なんだから会ったことがあるだろ。

女性は俺に一瞬視線をやってから、雪子おばさんに話しかけた。

「どう、箒ちゃん？　一夏くんが会いに来てくれたわよ」

「ふえ？　い、一夏！？」

俺と雪子おばさんの顔を交互に見ながら、あきらかに動揺している姿を見ている女性。

俺の名前を聞いてからのリアクションから、本当に覚えていてくれたことがうかがえてうれしい。

「えっと……久しぶりだな箒」

「ひ、久しぶりだな」

「……………」

「……………」

か、会話が続かない。確実に目の前にいる娘が幼馴染の篠ノ之箒だということはわかった。数年間会っていないのだから話したいことはいろいろあるのだが、上手くまとまらないしどうしよう。

「2人とも、お見合いじゃないんだから黙っていちゃダメよ。」

そうだ、あとは私がやっておくから、二人で夏祭りに行つてらっし

やいな」

ここで助け船が入る。でも、箒は巫女さんの格好だけどいいのか？

「え？　で、でも仕事が……」

「いいからいいから。浴衣は出してあるから、それに着替えちゃいなさい」

箒も俺と同じ疑問があったようだが、勢いに押されて母屋に戻って行く。雪子おばさんは箒が中に入ってしまうと、俺に顔を寄せて言った。

「私はこれから箒ちゃんのだわりの仕事があるから、ちゃんと箒ちゃんをエスコートしてあげてね」

「あのっ！」

俺が呼び止める前に行ってしまった。一緒に廻るにしろ廻らないにしろ、箒と話し合わなくちゃな。

××××××××××××

それから１０分ほど経ったころだろうか。母屋の戸が開き、浴衣姿の箒が出てきた。

「ま、待たせたな」

「いや、気にしてないから大丈夫」

「……………」

「……………」

どうしようか。鈴の時と違って人生の3分の1くらいブランクがあるし、どこから話を切り出せば良いものか。そうだ。

「去年、剣道の全国大会で優勝したつてな。おめでとう」
「……………」

篤は俺の言葉を聞くなり、口をへの字にして顔を赤らめた。どうやら怒っているようだ。でも、褒めたのにどうして……。

「なんでそんなこと知ってるんだ」
「なんでつて、新聞で見たし……………」
「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

元新聞配達を舐めてもらっては困る。
これでも日本のクオリティペーパーである東スポを読んでいたのだ。千冬姉がドイツで教導をしていたころなんて、外貨の両替のために日経も読んでいたんだぜ。
……………もつとも、どれも購読はしてないけど。

「あー、あと」
「な、何だ!？」

なんでこんな剣幕で俺に接してるんだ? お互い高校生なのに呼び捨てはさすがにいけないかったのだろうか。いや、あっちも呼び捨てな訳だし……………。

「あ、いや……………すまん」

俺が友人関係の修復のための一手を考えていると、箒はバツが悪そうな顔をして謝って来た。

「その……お前は私のことを忘れているのではないかと思っていたんだ。仮に覚えていたにしろ、お前からの手紙の返事を出すことができなかったのだし……」

「バカ。そんな訳あるか」

「え……？」

箒のヤツ。そんなこと気にしてくれていたのか。

箒が転校後、俺は何通か手紙を書いた。送ってからしばらくは返事が来ないことを心配していたが、千冬姉が箒の境遇を説明してくれてからは何か事情があるのだと思っていたため、別に怒ってなどいない。

「何か事情があつたんだろ？ それに……」

「それに？」

なんだろう。箒の目が期待に満ちている。

よし、見事応えてやるぜ。

「幼馴染だし、同門だったじゃないか」

「……………」

あきらかに落胆した様子を隠しもしない箒。何が、何がいけないんだ。

「はあ……。見た目こそ変わったが、お前は昔と変わらないな」

「うるせえ。そっちだって相変わらず男っぽいし、髪形だって一緒だろうが」

「よ、よくも覚えているものだな……」

目を丸くする箒。

お前、自分が特徴的だっけってわかってないだろ。剣道で鍛えているだけあって背筋が伸びて姿勢がいいし、ポニーテールがなんというかチヨンマゲみたいで……サムライっぽいんだ。

だが、反論は色々あったが、今は言うべき言葉が別にある。

「忘れられるかよ。お帰り、箒」
「ただいま、一夏」

昔と同じ笑顔が返ってきた。

続く。

12話（後書き）

今話の改変

- ・ 箒に対して、一夏の押しが弱い（？）
- ・ 箒がすぐに手を出さない。

今話の捏造設定

・ 雪子おばさんについて。（原作では箒の父方母方どちら側の親戚とか不明。あと一夏とこれくらい縁があつたかも不明。挿絵さえあれば、彼女はきっとチェルシーさん並のインパクトを読者に残したことでしょう。）

あとがき

箒さん大復活の回。どうも妹キャラをメインヒロインに据えるのが私は苦手なようで、蘭ちゃんが仇だったり噛ませだったりしますね。次回もお祭りは続きます。

クオリティペーパーの件は最初、朝とか売にしようかと思いましたが、毒が入り過ぎそうなのでネタに走りました。

13話

こうして話すのは一体何年ぶりだろうか。

思い出の場所で篠ノ之箒は思った。

彼女の横で花火を見上げている幼馴染　織斑一夏は、6年前と違つて彼の姉に似た精悍さを備え、それでいて昔と変わらぬ気遣いを持っていた。

もう決して実ることはないだろう。そう諦めて熾^{おき}火になっていた初恋が、まったくすぶり始めようとしていた。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』　13話

さて、これからどうしよう。

俺は祭りの喧騒の中、悩んでいた。理由は隣を歩いている篠ノ之箒についてだ。6年ぶりに再会した彼女は記憶にある姿と比べてずいぶんと綺麗になっていて、なぜか会話がうまくいかない。

彼女の叔母のすすめで一緒に縁日を散策しているが、さっきからうつむかれているばかりで会話を切り出せない。はぐれないように繋いだ手は離さないでいてくれるので、俺に嫌悪感を持つている訳ではないのだろう。だが、彼女の思惑がまるでわからない。何か話の糸口にならないかと思ひ辺りを見ていて、ふとある看板が目に入

った。

「箒」

「な、なんだ」

「あれ、やらないか」

そう言っ て俺が指したのは……

「『射的屋』か。構わないぞ」

射的屋の看板だ。

この空気を銃で壊してくれないかとゲンを担いだけど、目論見どおりに行きそう で良かったぜ。

「へい、らっしやーい」

「おじさん、2人分ください」

「お、兄ちゃん、別嬪さん^{べっぴん}連れてるね。

よしっ、おまけなしだ！」

「そりや ないですよ。数年ぶりに会った友達との記念にしたいんです。なんとか ならないっすか？」

「そりや 兄ちゃんの行動によるな」

俺は値段表を一瞥し、箒が巾着袋を開く前に射的屋の対象に2人分出した。

「はい、2人分お釣りはなしの はずです」

「一夏！ 私の分なら……」

「いいから奢られろっ て。箒は財布しまっ とけよ」

「……すまん」

箒に気を遣わせてしまったみたいだ。

これが鈴だったら素直に奢られるどころか、奢るようにねだって来るんだがなあ。

「まいど。兄ちゃん、最近のガキにしちゃ甲斐性あるな」

大將は気持ちのいい笑顔で銃を2丁差し出してくる。

「ほら、弾一発オマケだ」

「2人居るんですから、2つ下さいよ」

「言っじゃねえか。よし、もう一つ付けてやらあ」

俺の選択は正解だったようだ。いくつかコルク弾の乗せられた皿に、もう1つ弾が乗せられる。

「それじゃ、いくぜ。大きい景品当てた方に食べ物奢りな」

「ああ。受けて立とう」

昔は剣の試合でよくやったものだが、箒は賭けに乗ってくれた。不敵な笑みを浮かべているあたりかなり打ち解けてきたか？

銃身の先端にコルク弾をセット。そして、俺は片目を閉じて狙いを定めた。

×××××××××××

「いや、悪いな。焼そば奢ってもらっちゃって」

射的屋での勝負は、お互い弾が景品もかすりもしないと言っ一進

一退の攻防で進んだ。しかし最後の弾で俺が見事、犬だかうさぎだかわからないぬいぐるみを落とすことで見事に勝利を収め、箒に焼きそばを奢ってもらったこととなったのである。

「……気にするな。射的屋で奢ってもらった礼とでも思っておけ」

そう言うが、箒の顔は仏頂面。明らかに言葉通りに捉えたらいけない。俺が取ったぬいぐるみのスイッチが入って、『ボクトケイヤクシテマホウシヨウジヨニナツテヨ』って音声が流れるくらいには力が入ってる。

あげたものだからどう使ってもいいけど、さすがに目の前で壊しては欲しくないぞ？

「そうだ、お前も食う？ うまいぞ」

俺は箸で焼きそばを一口分くらい取って、箒に差し出した。勝負の景品を分けてもらう事を遠慮したのだろう。少し迷っていたが、結局箒は焼きそばを口にした。

「ん、ぐ。お、思ったより、うまいな……」

「だろ？ それに、箒も腹減ってるだろ？ 神楽やってたし。ほれ、あゝん」

「むぐむぐ……。う、うむ。そうだな。そうかもしれないな……」

2人で交互に食べていけば、焼きそばもすぐになくなってしまう。夜はあまり食べない俺でも、焼きそば半パックだけでは夕食とするにはいささか足りない。それに、肝心の会話はあまり弾んでいない。そうだ。

「なあ箒。どこかで座って食べないか？」

「そうだな。祭りは楽しいが、お互い積もる話もあるしな」

俺の提案を箒は受け入れてくれた。

俺たちはどこか座れる場所がないかと見回すが、ほとんどは店舗のみ。あるいはベンチと簡易テーブルくらいはあってもすでに満員状態。

「ちょっと言うのが遅かったか？」

野郎なら石段や石垣に腰を下ろして……でもいいのだが、箒は女の子。お尻を冷やしてはいけない。それに、着ているのは浴衣だ。けっこういい生地だし、汚れてもホイホイと家で洗濯できるものでもないだろう。

いつそまた母屋にでも行くか。

「一夏、いい場所がある。まずはいくつか買っていこう」

一体どこだろう？

ブランクがあるとは言えここは箒の、文字通り庭だ。俺の知らない何かがあるのかも知れない。手を引かれ、手近にあった焼き鳥の屋台に向かった。

××××××××××××

箒が連れてきたのは、篠ノ之道場。俺達がかつて剣を学んだ場所だ。

ここ数年訪れることは無かったが、かつてと変わらないように見える。

「毎週開かれている剣道教室の際に掃除しているそうだから綺麗なはずだ」

靴越しに砂利の感触を感じながら道場の縁側に来ると、箒は縁側に腰を下ろしてしまった。神聖な道場で飲食してはいけないと思うが、縁側くらいならセーフなのだろうか。

「ほら、お前も座れ」

左の掌で彼女の隣の板張りを軽く叩きながら、座るように言うくる。

とりあえず俺は箒が叩いていた位置から1人分ほど開け、腰を下ろした。

「何食う？」

開けたスペースに焼き鳥串の入ったパックにジャンボフランクの乗った皿、そしてポテトの入ったカップを置く。
そして箒から缶のお茶を受け取ると、プルトップに指をかけた。

「……ん、く。ぷふあゝ！」

火照りが内側から冷めて行く。

体のことを考えるなら常温の飲み物の方がいいんだけど、やっぱり暑い夏には冷たい飲み物がうまい。

「さすが姉弟と言ったところか。ビールを飲むときの織斑先……千冬さんにそっくりだぞ」

「そうか？ 自分ではあまりわからないんだが」

あれ？ 千冬姉がビール飲むところなんて、箒は見たことあったっけ？ 転校したのは6年前だから千冬姉はまだ18だぞ。それに『織斑先生』って言いかけてたよな。

「なあ箒。お前が通ってる学校って……まさかIS学園？」

「ああ、そうだ。ひょっとして、千冬さんに聞いてないのか？」

そう言えば千冬姉に届け物した時、居たなあ。

しかし、俺の幼馴染の女の子はどうしてこう、ことごとくIS学園に入学しているんだろう？ ネギまを食べつつ考える。

「千冬さんのクラスだと言うのに教えないとは……。やはりあの人は姉さんに関わらせたくないのか……」

箒は何やらブツブツ言いながら考え込んでしまった。

2人つきりだというのに話せないんじゃ、1人でいるのと変わらないじゃないか。

俺はジャンボフランクの串を一本取ると、下を向いている箒の口に向かって突き出した。

「む？」

「1人で勝手に納得してるなつての。あと、冷める前に食え」

「う、うむ」

俺の手から箒が串を受け取ろうとした時、ドンと大きな音が響いた。一瞬様々な光が箒の浴衣の白地の部分に映る。

林の木々の隙間から、空に浮かぶ大輪の花火の一部が見えた。

「しまった、もう8時だ！」

箒は巾着から携帯電話を取り出したかと思うと、急いでフランクを食べ始めた。

「急げー夏。早いところ食べなければ、花火が終わってしまう」

歩きながら食べればいいのか、その時は突っ込めなかった。とにかく、言われるままに俺は焼き鳥の串に手を伸ばしていた。

××××××××××××

結論から言おう。俺たちは花火をきちんと見ることは出来なかった。

「草履で走るもんじゃないな」

できるだけ背中に当たる感触から意識をそらしながら俺は言う。
柔らかい2つのナニ力などない。

あるのは人一人の重さだけ。

だから……勃たないでくれ、俺の相棒。ジーパンでは目立つんだ。

「すまん……」

後からは箒の声。

そう、俺は箒を背負って歩いていた。

急いで食料を食べ終えた俺たちは、花火を見るにうってつけの秘密の場所に向かっていった。しかし、走るのには向かない見た目重視の草履を履いていたのがいけなかったのだらう、箒が転んでしまっ

たのだ。しかも悪いことに鼻緒が切れてしまい、靴のある母屋に戻るために俺は箒を背負う事になったのだ。

「一夏、重くはないか？」

箒は俺におぶわれることに最初抵抗をしていた。鼻緒の切れていない方の草履を履いてぴょんぴょんと飛んでいたが、さすがに母屋に着くまでは続けられない。

おぶわれてからも重くはないかとか何度聞いて来るあたり、自分が重いと思うてるのかも知れない。

「平気だつて。なんならダッコしてもいいんだぜ？」

酔いつぶれた千冬姉をベッドまで運んだり、時々年を誤魔化して派遣のバイトで引越しの手伝いをした俺にとって、女の子1人くらの重さは大したことはない。

断っておくが、千冬姉を運んだことを挙げたのは、あくまで人を運んだ経験としてのたとえだ。千冬姉は決して太ってなどいない。出る所は出てるナイスバデー（死語）だけど、適正体重だ。決して重くなんかないぞ。

「そ、そうか。では……いや、やっぱりこのままで頼む」

「？ まあいいけど。もう着くぞ」

一回離れたが、また俺の背中に箒の成長の証が当たってくる。そう言えば束さんのは千冬姉よりもデカかったな。さすが妹なだけある。

頑張れ俺。耐えるんだ。

俺はガラガラと音を立てて引き戸を開ける。

「もういい。ありがとう」

簞が降りてくれたので、急いで板張りの上に腰を下ろす。同時に、まるで疲れたかのようにうつむいて息を吐いているので、絶対マイサンは見えない。完璧なカムフラージュだ。

「今日は……」

「今日は楽しかったな」

俺の隣に腰を下ろした簞。だが彼女が口を開いて何かを言う前に、俺は割って入った。だって、あんな深刻そうな顔してるんだぜ？

「……………」

「……………」

それから、またお互い話しかけられずにいた。どのくらいたったころだろうか、古い柱時計が大きく鳴った。

「今何時だろ」

「ちょうど9時だ」

いつの間にか携帯電話を巾着から出していた簞が教えてくれる。明日もバイトあるし、そろそろ帰らないといけないな。腰を浮かせかけたところ、シャツの裾が引かれた。

「一夏！」

「なんだ？」

「その……………」

下を見ながら、簞は閉じたままの携帯電話を手で弄んでいる。

おお、そうだ。アドレス聞いてなかった。

「篤、アドレス交換してくんない？」

何か悩んでいたようだった顔がぱあっと、明るくなる。

「ああ。構わないぞ」

「よし。そんじゃ、赤外線ですぐ俺が送るから、メールくれ」
「わかった」

つづく。

13話（後書き）

今話の捏造設定

・一夏の過去に行ったバイト。

あとがき

篤さん回（？）終了。もう彼女を空気とは呼ばせない。

本当はフランクフルトを奢ってもらった一夏君が「ほら、お前も食ってみるよ、うまいぞ」って差し出して、太いのを啜えた篤さんの顔を見て海綿体を膨張させるという案もありましたが、ボツにしました。いくら夜中のテンションが上がった状態で書いていても、それ位の良心は残っています。

余談ですが、銃で狙いを付ける時は両目開けないと距離感がずれたりしますよ。N i t r + っぽい豆知識です。

14話

9月1日。

長い夏休みも終わり、日本の多くの高等学校では始業式を迎えていた。藍越学園でもそれは一緒だったのだが……。

「まず問題用紙配るぞ」

式を終えた生徒達には夏休みの課題の確認試験が待っていた。

五反田弾のクラスでも、担任の三岡先生がブーイングをする生徒に「落とすぞ」と脅しをかけつつ問題用紙を配っている。

弾も前から廻って来た用紙から一枚とって、残りを後ろに廻していく。

げ！　こんなにも記述が多いのかよ。

誰かが思わず口に出してしまった感想だが、彼も賛成であった。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 14話

『夏休み確認テスト』と言う、そのまんまな名前のテストを終え、俺は帰路に就こうとしていた。我が化学部は顧問の西先生の温情で今日はおやすみ。部室である化学実験室に着いてから知ったんだけ

ど、どうせなら夏休み中の活動の時に知らせてくれればよかったのに。

部室でダベッていた部員はみんな、家が反対方向やら夏休み前の
考査での再試験やらで、一緒に帰れるヤツがいらない。弾でも誘っ
て帰ろうかと思っただが、生憎あいにくと軽音部はちゃんと練習をしているよ
うだ。「ウチナーが危ない。でーじ超ヤバイ」とか聞こえる。

そう言えば、弾が文化祭でネタ系ソングを演奏しなけりゃならん
とかばやいていたけど、これかな？ まるで心当たりがないけど、
たぶんアニメの歌なんだろうな。

まあ、とにかく今日に限ってツレが一人もいないので、俺は寂し
く下駄箱に着いた。

「やあいつちー。帰りかい？」

下駄箱に着くと、ジャージ姿のクラスメイトが靴を履き替えてい
る所であった。

「そうだよ。そっちは……部活、だよな？　なんでスパイク脱いで
んの？」

部活動野開始時間から、まだ30分と経っていない。運動部員が
帰りの支度をするには早いよな。

「これから外でランニングなんだよ……」

俺の問いに答えると彼女は大きく溜息を吐いた。

そう言えば今日、新しいスパイクを買ったとか教室で自慢してた
な。せっかくのお披露目の機会がなくなっただって訳か。

「何やってんのさ、ヘプ。早くしなきゃ置いてかれるわよ？」

聞かない声。他のクラスの生徒だろう。へプと言うのは部活でのあだ名だろうか。

今行く。

相手にそう告げると、彼女は急いで靴紐を結び、立ち上がった。

「いっちー、また明日ね^{あした}」

そして俺に一声かけると、靴箱から走り去ってしまった。じゃあなど、軽く手を振って見送ってやり、俺も上履きから運動靴に履き替える。

さて、彼女と違って俺は時間ができてしまったが、何をしようか。

××××××××××××

学校から帰る途中で買い物を済ませても、アルバイトに向かうまでには何時間か余裕があった。夕食はシフトを終えてからファストフードで軽く済ませるつもりなので、準備はしなくてもいい。

ちょうど切れていた洗剤を買ってきたところだし、風呂の掃除でもしようか。

ドラッグストアの袋から水回り用洗剤の詰め替え用パックを出すと、俺は風呂場へ向かう。

「ん？」

向かおうとしていたのだが、携帯電話に着信。この音はメールだ。鞆から携帯電話を取り出すと、発信者は箒だった。

篠ノ之神社でのお盆祭りの時にアドレスを交換して以来、箒から

は毎日のようにメールが届いている。最初の頃はすぐに返信していたんだけど、アイツも返信が早いし会話みたいなペースになってしまっただよな……。

返事はバイトの後でいいか。

携帯を置いて洗剤を手についたら、また着信が入った。今度は鈴だ。

「どうしてこう、間が悪いんだ……」

折りたたみ式の携帯電話を、手首のスナップを利かせて勢いよく開く。そして通話ボタンを押して顔に持っていた。

「もしもし」

『一夏、今いいかしら?』

「ああ、いいぜ。なんか用か?」

『え、あ……うん』

なんだろう。どこことなく歯切れが悪いな。

『なんか不機嫌そうな声だけど、もしかして……タイミング悪かった?』

しまった。ムシの居所の悪さが声に出ちまってたみたいだ。せつかく友達が連絡してくれたのに、何やってんだ、俺。

「悪い鈴^{リン}。ちょっと月のものがな……」

『わかるわ。あたしも一昨日^{おととい}くらいまでグロッキーだったし……って、アンタ男でしょうがッ!』

ノリツツコミが入った。

さすが鈴、付き合いが長いだけある。でも、生理の時期なんて男に言うもんじゃないぞ。

『まったく、アンタは……心配して損したじゃない』

「冗談だつて。ホント、ごめんな」

怒らせちゃったみたいだけど、通話を切らないでいてくれるってことはそんなに酷くご立腹と言う訳でもなさそうだ。ジョークの効果はあつたみたいだな。

『まあいいわ。13日の日曜にIS学園（あたしの学校）の学園祭があるんだけど、招待券欲しい？』

へえ、IS学園の学園祭は早いんだな。藍越はまだ夏休み明けて感じて、学園祭の“が”の字も出てないぞ。

「ああ、欲しいな……でも」
『でも？』

弾が前に「美少女揃いで有名なIS学園に行ってみてえ！」とか言っただんだよな……。あいつのこと考えたらここは譲ってやるべきか。でも、鈴と箒だけじゃなく千冬姉にも会えるかもしれないし……。

箒？

そつだ、アイツがいた！

「悪い鈴、招待券はちよつと保留にさせてくれ。後でかけ直すから」
『なんか予定あんの？ 7日くらいまでには返事なさいよ』
「ああ、ありがとう」

通話を着ると、携帯の画面を見る。大きく表示された「メール1件」の文字を十字キーで選択し、決定ボタンを押した。

「よっしゃ、箒グッジョブ！」

開かれたメールの文面を見て、俺は思わずガッツポーズを取ってしまった。

0001

Date 9/1 16:34

From 篠ノ之箒

Sub

13日の日曜日にIS学園の学園祭があるんだが、入場券はいらないか？」

xxxxxxxxxxxx

「よっしゃ、でかしたぞ一夏！」

弾が俺の背中を思い切り平手で叩いた。

痛い。同時に弾の大きな声に教室中の視線が集まる。

箒と鈴とのやりとりを終えた次の日、俺は弾に昨日の話を伝えていた。最初の方は恨めしげな視線で見っていたのだが、「2枚手に入ったから、一緒に行こう」と言ったらこの始末だ。

「いやあ、普段はお前のモテっぷりには辟易してたんだが、今回は感謝感激雨霰だ」

俺がいつモテたんだよ。

突っ込もうとかと思ったが、言うべきことはそっちじゃないな。

「礼を言う相手が間違ってるぞ。チケットをくれたのは鈴と篝なんだ、俺に言っただろう？」

「もちろん礼は言っさ。なんなら、@クルーズの期間限定パフェを奢ってやったって構わない。でも、それも一夏が話してくれたからだろ？」

@クルーズのパフェって……たしか2500円もするヤツだ。

「すげえ太っ腹だな」

「ああ。それくらいはしてやらないと鳳大明神さまファンの罰が当たるっ
てもんだ」

すごくいい笑顔な弾。

おっと、チャイムが鳴った。教室に戻らなきゃ。

「それじゃ、続きは帰りに」

「おう、またな」

続く。

14話（後書き）

今話の捏造設定

・学園祭の日にち。（学園祭の日程は出し物を決めた3日から一夏の誕生日（9月27日）の一週間前にあつたシャルロットとのデートの間の2回の日曜日　9月6日から13日のどちらかの日曜日だと推定し、準備の時間を考えて後者を選択。しかし、それでも短い。授業を全く行わない、準備専用の日でもあつたんでしょうか。）

あとがき

今回はIS学園祭への繋ぎなので、少し短め。原作に準備期間の話がもう少ししっかり書かれていたら、長くなつたのかも。会長をもう少し前から出しとけばよかったのに……。そう言う私は、祭りは準備が楽しい派。

最後に。女の子に月の物の話をするのはデリカシーがないですよ、きつと。ご存じない人も多いでしょうが、ふざけていた主人公に「あたし、今生理」と言つて黙らせた八重やえがし櫛くし翼つばさ穰はらはすごいっす。

15話

IS学園構内の正門に近いあたり。

今日は公人私人問わず多くの人が訪れるためにいつもより人の出入りのあるそこで、篠ノ之箒は想い人を待っていた。

メイド服 クラスの出し物であるメイド喫茶の衣装を身に纏っているため、周囲の好奇の視線を浴びている。特に、彼女のコンプレックスである胸を強調するデザインであるので、視線もそこに集まり恥ずかしい。だが、彼が来れば、一夏が来れば、2人つきりで模擬店を回る時間があるのだ。

まだか、早く来ないのか。

駅から正門に至る道をずっと見つめていると、後から肩を軽く叩かれた。

「や、」

チャイナ服の少女が居た。

八重歯が愛らしい笑顔を浮かべている彼女は、隣のクラスの鳳鈴音だ。ISの合同実習授業で同じ班になったことがあり、それ以降箒とは度々話す仲である。

「^{ファン}凰か。一瞬、誰だか気付かなかったぞ」

「アンタに言われたくはないわよ。侍って印象だったけど、メイド姿も中々似合うわね」

「勘弁してくれ」

正直、この様に可愛らしい衣装は自分には似合わない。自分ではそう考えている箒は首を振って否定した。

「まあいいわ。一夏たちならさつき駅に着いたって連絡があつたら、そろそろよ」

「ああ、ありがとう……って、え？」

どうして一夏を知っている？

箒が疑念を口にしようとする前に、凰は確認してきた。

「あたしも長いこと日本に住んでいたって、前に話したことあったわよね？」

「ああ。たしか中学2年の冬に中国に戻って、それからISの勉強をしたとか……」

大抵、代表候補生になるようなIS操縦者はもつと前から学んでいるものである。箒もその話を聞いた時は驚いたものだ。

「そう。それで日本にいた時 小学校の4年から中2までさ、あたし、一夏と同じ学校に通ってたのよ。いわゆる幼馴染ってヤツ？」

ちょうど、箒が束のせいで日本中を転々としていた時期と重なる。ダンやカズマ、他にもおぼろげながら覚えている名前や、全然知らない名前が出てくる説明と、話している凰の顔や口調から大体のことは箒にもわかった。

凰鈴音も織斑一夏の幼馴染で、彼に惚れている。そして、自分が知らない一夏を知っている、と。

丸めて持っていた模擬店の案内図が、くしゃりと潰れた。

『もし一夏が藍越学園を受験できていたら』 15話

「いやあ、女のそ……ゴホンゴホン。学園祭、楽しみだなあ」

IS学園へと向かうモノレール。俺と浮かれ男は吊革に掴まって、到着を今か今かと待っていた。

「おい弾。こっち見てるって」

「アン？ さっきの女だろ、気にすんなって……たく、お高くとまりやがって」

前の前の駅まで俺たちが座っていた席の方から睨むような視線が来る。空いていた向かいの席に陣取ったかと思ったら、俺たちをどかして連れを座らせようとした面の皮の厚い女たちだ。関わり合いになると面倒なことになりそうなので、こっちからどいてやった。

「まったく、そばに杖突いた爺さんが立ってるってのによ」

「でも、俺たちがうるさいのも確かだぞ。もう少し声を落とそう」

俺と弾は顔を寄せあい、小声での会話に切り替える。

「うえ……。アイツらの手にチケットあるぞ。やだなあ、IS学園に行くのかよ」

「似たような年だったから予想はしてた。せつかく顔は十人並み以上なのに、もったいない……」

まだ見ぬ運命の女性との出会いを期待して向かう弾だが、さすがにあんな連中は願い下げの様だ。

「見ろよ弾。結構近づいたぜ」

話題を変えようと外を見ると、海の上を走っていたモノレールは段々と島に近づいてきているようだった。IS学園の構造物も次第に視界に入ってくる。

「すげえな、アドバルーンが浮いてるぞ」

一際高いモニュメントを中心に幕を垂らした風船がいくつも敷地内で浮いていた。その周りにいる人型はISだろうか。

『まもなくIS学園前へ、IS学園前へ。IS学園、島嶼赤十字病院に御用の方はここでお降り下さい』

車内アナウンスが減速して行く車内に流れる。弾を含む気の早い乗客はそれを聞くとドア上部の液晶で確認し、降車口の前に並び始めていた。

『IS学園前へ、IS学園前へ、到着です。お下りのお客様はお忘れ物のないよう……』

乗客のほとんどはこの駅で降りるようで、ホームはすぐに人でごった返した。

「おい一夏、はぐれんなよ」

「わかつてる！ お前もあんまり女とくつつくなよ」

不可抗力でも女と体が触れて、痴漢扱いされるとするのは電車でもよくあることだ。噂だと政敵にスキャンダルを作るためだとか、窓際族を解雇するための方便として痴漢をでっちあげる商売すらあるらしい。

人の波に流された俺たちは自動改札を抜け、階段を降りると梯子車用スペースとして広場になっているあたりで合流した。

「よし、さっそくIS学園へ出発！」

弾が今か今かと張り切っているが、俺はちよつと待て、とストッブをかける。

「まずは連絡しとかないな。入れちがいになったらイヤだろ？」

「鈴はともかく、箒って娘はお前がいればいいだろ？」

「一応挨拶くらいはしとけよ」

履歴の2番目を選択し、コール。

「長いな」

「アイツだって忙しいんだからしかたないだろ……ん？」

留守番電話サービスのアナウンスが流れてきたが、その途中でようやく鈴が電話に出た。

『はい、もしもし？』

少し抑えた声。

後ろからは忙しそうに話している女子の声が聞こえる。

「一夏と弾だけど、忙しいとこ悪いな。今駅着いた。受付したら行

くから、お前のクラス教えて」

『あたしが迎えに行くからいいわよ。もし会えなかったら、1年2組に行つてて』

「わかった、1 - 2だな。」

弾、お前から何か伝えとくことは？」

隣で辺りを見回していた弾に声をかける。

「俺からは特にないぜ」

「わかった。」

それじゃ、また後でな」

『ええ。一般入場口の辺りで待つてゐるわ』

向こうから通話を切られる。

開店直後なんて忙しいし、悪い時にかけたかな？

「鈴はどうだつて？」

「入口の近くで待つてゐるつてさ。箒にもかけるから待つてろ」

どうも箒とはメールでのやりとりが多いので、電話番号はアドレス帳から探す方が早かった。

『こちら、留守番電話サービスです』

鈴の時のようには行かなかった。一応メッセージを残しておく、通話を打ち切る。

「ダメだったのか？」

「ああ。箒のやつ、電話荷物に入れっぱにしてんのかな？ ま、教室は知ってるからいいけど」

箒は、我が姉が担任を務める1年1組の生徒である。ちなみに山田先生は副担任だ。

「そんじゃ、いざ女の園へ！」

「お〜」

もう、いちいち突っ込まなくてもいいよな？

××××××××××××

その後は『IS学園祭チケット5000円で買います』と言う、よくアイドルコンサート前に居るような連中をやり過ごし、ようやくIS学園正門が見えるところまできた。

彼らはIS学園の学園祭ではダフ屋の横行や保安のため、チケットのチェックが厳しいとか言う話を知らないのだろうか。

「おっと、すいません」

「Oh（あら、）、しめんないSorry」

知らない女性と肩がぶつかってしまったが、お互い様と言う事にしてくれたようだ。危ない危ない……。

「さっそく金髪ナイスバディで美人なお姉さまとイベント起こしやがって……」

「いや、ただぶつかったから謝っただけだったの」

ちよっと腕に柔らかいのが当たった感触はあったけど、顔なんて

よく見えなかったぞ？

「あそこの男子、結構レベル高くない？」

「誰かの彼氏かな？」

「いや、あれはカップルに違いない！」

おっと、なんだか視線を集めまくってるぞ。よく見れば周りほとんど女の子だし、男が居てもスーツや軍服姿のオッサンばかりだから、そりゃ目立つよな。

「ふ、ふ、ふ……」

隣は隣でなんだか不気味に笑ってるし……。

「おい弾。あんまり変な行動取ってるととっ捕まるぞ。一応ここは軍事施設に近いんだし……」

「女の子、それもレベルの高い娘たちに注目されてる……これは出会いの前触れか……」

ダメだ、聞いちゃねえ。

弾の奇行に呆れていると、横から声をかけられた。

「ちょっといいですか」

なんだかのんびりとした声。振りむくと、眠そうな顔をした女子生徒がいた。袖を余らせた制服が特徴的で、腕に付けた腕章には『生徒会』の文字が光っている。

「規則なんで、チケット見せてもらってもいいですか？」

のんびりとした口調で言われ、俺たちは……いや、弾は握ってたからすぐだったけど、俺は鞆からチケットを取り出して渡した。

「えっと……1年2組の鳳鈴音　ああ、りんりんか！」

どうやら彼女は鈴の知り合いの様だ。見た目幼いし、俺たちとタメかな。

「こっちは1組の篠ノ之箒　しのののさんだ。私とおんなじクラスだよ。ねえねえ、キミたちって、りんりんとしのののさんの彼氏さん？」

チケットを返してくれると、彼女は俺たちに変なことを訊ねてきた。小中と散々からかわれたネタだけに、ちよつと体が身構えてしまふ。まあ、1枚しかないチケットを渡した相手、しかも同世代の男子ならそう言った想像に直結するのは普通なんだろうけどさ。

「いんや、両方ともコイツの女。5股かけてる内の2人なんだ」

と、ここで弾がとんでもないことを言い放った。

「弾、おまえなに言っ」

「わああ！　ハーレムなんてやるうっ！」

彼女居ない歴〃人生の俺に何を言いやる！　そう俺が否定する前に、少女が歓声を上げた。その途端、周りから視線が集中する。

「ヒソヒソ……男の癖に、許せないわね」

「ヒソヒソ……女の敵ね」

「きつと、あのロン毛君もハーレムに入ってるんだよ！」

男性蔑視の世の中、例え伝統的に一夫多妻制が可能となっているイスラム教国でさえも、複数の女性と付き合う男は女から批判を受ける。俺に今注がれている視線の多くは、マンモスだって凍死してしまう位の冷たい視線だった。

正直、今すぐここを逃げ出さないと殺されかねない気がする。

「ようつし、生徒会権限で逮捕だあ！」

「へ？」

垂れた袖口から手錠が現れ、俺と弾の両の手首が拘束される。どこかのんびりした印象を与える娘だったが、その動作だけは素早かった。なので何の抵抗もなくお縄を頂戴してしまう。そして手錠に結ばれた縄を引かれて、俺たちは校舎内へと引っ立てられてしまうのであった……。

つづく。

15話（後書き）

今話の捏造設定

- ・アドバルーン
- ・IS学園前駅（原作では名称不明）
- ・ダフ屋（7巻で代表候補生をアイドル的に売り出すという話があったので、居てもおかしくないかと考えた）
- ・学園近くの病院名
- ・軍服姿のオッサン（各国軍事関係者が来場するとあったため。でも、来る途中、町中で明らかに浮きますよね）
- ・生徒会腕章。

今話の改変

・「公人私人問わず」の件（一般開放されていないと言っても、一般入試で入った娘は一夏同様友達とか家族にチケットを渡すかもしれないので、結構私人が来ているんじゃないかと予想。）

あとがき

IS学園学園祭の巻（前）。

当初は虚さんにチケット確認させたかったのですが、弾とのフラグを考える上で一夏と一緒だと問題があると思い、のほほんさんに登場していただくことと相成りました。

「各生徒1枚のみ配布可」のチケットを「2人連れの男子」が各1枚持っているという点から偽造を疑うイベントを入れたら、なぜか弾くん公開告白イベントになってしまい目的からずれてしまったんです……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5923r/>

もし一夏が藍越学園を受験できていたら

2011年10月5日21時42分発行